

新見市の文学

令和七年度

新見市文学選奨作品集



はじめに

新見市文学選奨は、創作活動を発表する場、共有できる場として長年にわたり続けられてきました。令和七年度は、小説・詩・短歌・俳句・川柳の五部門で一〇七件の応募があり、厳正な選考の結果、入選四点、佳作二二点を選出し、これらの作品を本冊子に収録するとともに、新見市のウェブサイトに一年間掲載いたします。

作品を応募してくださった皆様、本市文学選奨を支えて下さっている皆様に厚く御礼申し上げますとともに、本事業に対し、一層のご理解とご協力を賜りますようお願い申し上げます。

新見市教育委員会

公益財団法人新見美術振興財団

目次

短歌

∴ 13

入選 棘の間あいより 小田遵子

佳作 無題（うららかな春） 大道淳子

きれいな色に 田井芳枝

百姓の詩2 前田五郎

十三夜の月 小山明美

孤独な日々 松川洋恵

短歌（ジュニアの部） ∴ 19

佳作 泳ぎきったよ五十メートル 難波陽菜

ぼくのしごと 森 諒介

祖母のジュース 柴田悠加

ぼくのがんばり 三好隆太

無題（部活動） 中村姫菜

詩

入選 該当なし

∴ 5

佳作 蝶になつて 田井芳枝

イチジクの木 ”

お地蔵様の側で ”

○選評

○選評

俳句

入選 秋の蛇

西田利宏

佳作 無題（ビー玉も）

雪代 灯

父卒寿、母米寿を言祝ぐ

熊代一紀

仕来り習ふ

田井芳枝

茄子の花

山中節江

俳句〈ジュニアの部〉

佳作 無題（シャボン玉）

佐倉真愛

無題（暗い森）

瀬川佳那

無題（短冊に）

中山華来

無題（夏の夜）

横張海夢菜

○選評

川柳

入選 三回忌

大久保妃佐子

佳作 余生

山中節江

八十路の日々

橋本宏子

○選評

小説

入選 五百年の時空を超えて

秋月皓淳

佳作 チャリオット

吉田 徹

○選評

∴ 26

∴ 38

∴ 84

詩

固唾を吞んで蝶を見る

あたかも名残りを惜しむように

去るかと思えば戻り

立ちつくす者達の前で

清しい舞いを見せたあと

生け垣の中へ消えていった

「お祖母ちゃんや、あの蝶は……」

娘が乾いた声で言った

葬儀場の玄関先に
どこからか蝶が一匹現れて
ゆらゆらと舞った
娘や孫の周りを行ったり来たり
私の喪服の袂や裾に触れんばかりに

つかず離れず

鮮やかな黄色い蝶だった

葬儀を終えた夜
喪中の家は

しんと静まり返る

仏間に敷いた床の中で

在りし日の母を偲び涙する

「あ……」声にならぬ声

佳作

蝶になつて

田井芳枝

夜半にふと目を覚ますと

目の前を白い物が飛んだ

蝶だった

目を凝らして見たが

一瞬 ふわりと姿を見せ闇に消えた

——母だ——

蝶は死者の化身というが

まさしく それは

亡き母の魂の姿だった

送る者達の脳裏に焼きついて

それぞれの胸に残る別れとなった

納骨を終えてまもないある日

母の墓石に蝶が一匹とまっていたという

愛する者達よ

見ていておくれ

旅立ったあと私も

美しい蝶になって必ず

あなた達に会いに戻ってくるから

イチジクの木

田井芳枝

故郷の庭のイチジクの枝を

夫が持ち帰って挿し木にしたのは

もう十五年も前のことだろうか

小指ほどの太さの細い枝も

今や幹回り四〇センチにもなっている

毎年 秋口には必ず実をつけて

老いの食卓に色を添えてくれた

夫が逝って三年

昨秋 立ち寄った弟が

「この木は虫にやられているで」

と言った

「えっ？」

ぼんやり者の私は

耳を疑ったが

見れば弟の指摘通り

木には確かな異変があった

「そのうち枯れるで」

弟の言葉を反芻しながら

朝夕見守るうちに

冬を越し 春になり

木は 例年通りに

枝を伸ばし葉を広げた

今 七月の太陽のもと

枝々に小さな実をつけている

さながら

いとしい我が子を抱いているようだ

蝕まれた体でありながら

何と健気なことだろう

けんめいに育てている実が熟れたなら

この木を任務から解き放ち
静かに眠らせてやりたい

「いいよね」

遺影の夫に話しかけると
うなずいたような気がした

お地蔵様の側で
田井芳枝

越してきた家の近くに
地蔵様を祀る古いお堂がある
前を通るたびに

「おはようございます」

「こんにちは」

「こんばんは」

と頭を下げてはいたが
余所者には

何故か立ち入りが見たい
バリアーがあった

夫が逝って三年

ひとり居の寂しさから脱却すべく

思いきって昨秋

地元の老人会に入った

越してきて以来二十年

つきあいが無かったのに

満座の拍手で迎えられた

それから一年

誘われて

お堂の広場でグラウンドゴルフ

誘われて老人大学

誘われてお堂でご詠歌

引きこもりがちだった私を

口さがない友だちが

「まっ黒だね」と笑う

言われてみれば腕も顔も日焼け

お堂にあげり

お側近くで見ると

お地藏様も笑っておられる

気がつけば バリアー・フリー

さえぎる物のない広い空と

田園を吹き渡る風

この地の何と心地よいことか

老人会の仲間は皆

お地藏様のように穏やかでやさしい

目には見えないけれど

その中に

お地藏様もいらっしやるようだ

あと幾許の余生を

この地に溶け込み

この地の人となろう

どうぞよろしくと

今日もお地藏様に手を合わせる

選評

詩 小野田潮

応募者は三人。三人とも自身の日常生活から取材した作品を書かれている。個人的な体験を微細に綴った随筆を行分けして詩の形にしたような印象を受けた。説明過多になると、読者は作者の思いに想像を馳せたり、行間に隠されたメッセージを考えたり、つまり詩を読む楽しみがなくなる。詩は読む人によって解釈が違ってよい。詩において個人的な感情表現はできるだけ避けたい。「悲しい」とか「うれしい」とか書かなくても、読者には感じられる。そこに共感が生まれる。詩においては、あえて書かないということも大事です。

詩を書く前に好きになれそうな詩人の詩集を一冊でいい、読まれることをお勧めします。応募者のなかで、きわめて散文的な表現ながら、自身と対話し、表現しようという姿勢のみられる「蝶になって」他を佳作に選考しました。

◆佳作「蝶になって」

母との別れの葬儀場に、飛んできた鮮やかな黄色い蝶に母の化身を見る。あえて化身と書かなくても、別れのときに一匹の蝶の現前をさり気なく書かれるだけでも、作者の悲しみは

読者に十分に伝わってきます。三連以降の思い入れの深い作者の体験は、作者だけの体験として内に秘めておくべきことかもしれない。生の感情をそのままに書くと詩が通俗的なものになりがちです。

外も内もすべてを説明しようとする散文を行分けただけの詩になってしまう。詩はあえて書かないところが読者の想像力を駆りたて、また余韻も生じてきます。詩作においては何を、どこを削るかが重要です。

「イチジクの木」

人間も植物も終わりのあることを改めて教えてくれる作品ではあるが、感情移入が深すぎると、ひとりよがりの作品になりがちです。詩のなかに会話をそのまま持ち込むと散文的になるのでひと工夫ほしい。たとえば三連、六連、七連をけずるだけでイチジクへの思いに収斂した、ずっと引き締まっていたい詩になります。「さながら／いとしい我が子を抱いているようだ」とイチジクの実を擬人化して描写しているところなど、作者が発見した独自の表現だ。愛情をもって観察しているときに生まれたことばだ。

「お地蔵様の側で」

ささやかな信仰心をもって、地域の人々の中にとけこみ、充実した日々を過ごされている様子が描かれています。

選外のなかでは、「錯覚」と題された詩で、田のそばに止めていた車が、風が吹いて田の水に波紋が生じ、それを見ていたら目の錯覚により車がバックしているように感じ、慌てふためいている作者の動揺を切迫した筆致で描いていて、面白いと思いました。

短歌

入選

棘の間あいより 小田遵子

ひと月の付き添いの時間与えられ愛おしみいる夫の近くに
夫の香の残れるタオル首に巻くあなたの声の届かぬ今日は
もぎ取れば果肉は皮よりのぞきおり貴方に届けん柚子の若き香
自らも傷つきながら実る柚子棘の間あいより何を眺むる
庭先に大雪ゆきたるま残りいて正月過ぎの家は静もる
薄雪に小学生の靴のあと自転車二台のゆらゆらもあり
遠き日に三人姉妹で飾りたる雛人形はどこで春待つ
ジャガイモの芽の出る頃に帰りくる燕を待ちて車庫開け放つ
草取るに手ぐわのごとくよく動く七十年を使いし指は
鶯の渡りてウツギの花満はちる亡母はよ戻り来こきよう一周忌

佳作

無題（うらかな春）

大道淳子

うらかな春の陽気の真ん中で癌検診の結果に打たる
読みもせぬ雑誌を広げ平静を繕いおれど気になる診断
手術日を暦に赤で書き入れるわれ自らを励ましながら
仏壇に「手術の無事を」と手を合わせ心整える入院の朝
吾子三人育みくれし卵巣と子宮を明日は摘出さるる
冷たくて硬き手術台に身を委ね目を閉じれど心ざわめく
付けられし麻酔用マスクきついなあ記憶ここまで目覚めは術後
病室の窓に眺める遠山は緑濃くなり山桜咲く
農繁の最中なれども病あがりの我に料理を振るまいし友
病み癒えて家庭菜園再開す野菜の苗の香りの清し

佳作

きれいな色に

田井芳枝

朝夕に遺影の夫に声かける小さく鈴をひとつ鳴らして

春の庭めぐりて探す今朝の花夫に供える二輪三輪

般若心経西国御詠歌書き写し夫に手向ける手作りの本

ありがとう拍手と笑みに囲まれて八十歳過ぎて老人会デビュー

ひとり居の会話なき日々を脱け出して老いて元気な仲間と出会う

百歳体操集いのあとに誘われて寄れば西瓜をごちそうになる

夕食はおひとり様のお気楽でもやし炒めに鰹のたたき

都会じゃない過疎地でもないこの町にとけこむための飾りは要らず

一病を抱いてはいても吾の余生今宵きれいな色に染めたし

子を頼り隣近所に助けらる年金暮らしも一票を投ず

佳作

百姓の詩2

前田五郎

難儀して作った早苗植え終わり田植機洗う今日のご馳走

哲西の太鼓田植に加わりて引き綱すれば励ましの声

軽トラの荷台に座してお茶にする青稲揺らす風を浴びつつ

早々と梅雨明けすれば稲思うたまの雷雨は慈雨じゆうと思えり

「あちいなあ」と会う人ごとのご挨拶今年の猛暑つい口に出る

朝露に濡れたトマトをほおばれば朝の涼しさ身体からだに沁しみる

夕刻に蛙鳴けども雨降らず空を見上げる吾は百姓

米不足のニュースが日々流れ来て急ぎ稲刈り吾は百姓

稲刈りを終えた田んぼに赤とんぼ棲みか無くして夕日に映える

朝霧にまつげを濡らし田に入ればひこばえの青目に涼しき

佳作

十三夜の月

小山明美

日の射せば立ち込める雲海流れゆき広き青空に紅葉の峰
行列し古古古米買う映像に自給農家の日日有難き

米不足の心配はなき哲西町梅雨空に稲は青青と宙へ

早起きの鳥より先に畑に行く早もまつ赤なトマト食い荒しおり

台風の前は夜更けに強まりて稲を案じつつ雨音を聞く

月明かりに稲架掛けせしと義母の声聞こえるよな十三夜の月

熟れ色の小豆の莢は心地よく弾ける音は手のひら伝う

新緑の風に流され鯉のぼり過疎の空気を独り占めして

廃線か否か協議の芸備線ガタンゴトンと一両電車過ぐ

券売機のタッチパネルを何回も取り消し切符やつと買いたり

佳作

孤独な日々

松川洋恵

六十五年住み慣れし家を空ける時一人身の辛さ胸を突き刺す
県を越え西城町にてデイサービス友達できるも会話弾まず
スタッフの心遣いで友も増え同席の人と笑顔で話す
桜花咲き上野公園は人々々吾が四世代も写メにて収め
隣屋の壁に張りつく蔦カズラ我が物顔で建物覆い
五ヶ月振り屋敷の周りは草一面株元引けば子孫引き連れ
猛暑にて我の身体も悲鳴あげ診療所にて助けを求め
我が友も娘の居場所へお引越し寂しさ募るが幸せ祈る
若ければ登って見たい白馬岳色とりどりの高山植物
孫の住むベランダからの大阪城ライトアップは青赤緑に

佳作（ジュニアの部）

泳ぎきったよ五十メートル
難波陽菜

記録会ドキドキしたががんばって泳ぎきったよ五十メートル

夏休み海にプールに大はしゃぎ宿題残ったさあがんばるぞ

母さんと妹と行った夏祭りクレープ食べたなら甘かったなあ

たのしみはベットのものがねていたらレアなね顔に胸はずむ時

毎日の早ね早起き朝ごはんしっかり食べて元気モリモリ

佳作（ジュニアの部）

ぼくのしごと
森 諒介

によきによきと赤ちゃんたけのこはえてきたたけのこじるでたべてみたいな

朝顔とにらめっこする笑った顔やおこった顔でびっくりしたよ

カブト虫おきたらすぐ見るきょうも元氣きりふきゼリーはぼくのしごとだ

夏まつりしたいこたたくはおねえちゃんあせびっしよりでかっこいいな

クロールを二十五メートルおよげたんだととてもうれしかったよ

佳作（ジュニアの部）

祖母のジュース 柴田悠加

病院で電気メスの体験したよとり肉切ったらおいしいにおい
ちようちんの下でみんなと盆おどり心を一つにリズムをきざむ
夏だけだあかむらさきのしそジュース祖母とくせいのなつかしい味
たのしみはお菓子を作ろう混ぜて焼きやっとな完成口ほうばる時
外へ出て菌に負けない健康な体を作り元気でいよう

佳作（ジュニアの部）

ぼくのがんばり 三好隆太

えんそくでプラネタリウムびつくりだかぞくもつれてまた行きたいな
赤組はうんどうかいでがんばったとくてんしゅもくりレーでかった
大すきなぼくのかぞくはたからものねつがでたときたすけてくれる
あやとりがおぼえられなくてくやしいなもつとつくん明日もやるぞ
がくどうで大きくできたシャボン玉こんどもつくるぞもつと大きく

佳作（ジュニアの部）

無題（部活動）

中村姫菜

部活動汗水流しひたすらに日々の練習切磋琢磨す

暑い中運動場で汗流し飲み干した水努力の味だ

負け試合夢の中にも出現し勝てなかった事今にも悔やむ

もうだめだ何度粘ってこらえたかあの試合中光が見えた

もう一回声をかけながら汗流す君がいるから私も頑張る

選評

短歌 能見謙太郎

今年の応募作品十九編は、いづれも丁寧に詠まれていて、実感のこもった生活感のある歌に仕立てられており、どれも甲乙つけがたく幾度も読み返して審査しました。

ただ、声調の悪い歌の混じった原稿や、状況説明の歌が多かったり誤字・脱字の目立つ原稿は、選から外しました。

◆入選 「棘の間より」

- ・ひと月の付き添いの時間与えられ愛おしみいる夫の近くに
- ・夫の香の残れるタオル首に巻くあなたの声の届かぬ今日は

【評】御夫君との名残惜しい気持を、ぐっと押し鎮めての歌だろう。最後の付き添いが、御夫君の近くで出来たひと月間の作者の気持ちを察するには余りある気がします。

御夫君の残された移り香に、在りし日々の生活を思い浮かべながらも、淋しさを紛らわしている作者の、優しい性格から生まれた良い歌になっています。

◆佳作1 「無題（うららかな春）」

- ・手術日を暦に赤で書き入れるわれ自らを励ましながら

【評】婦人科の大手術をされた時の、心の葛藤をこの一連の歌に綴っておられて、感動しながら読みました。無事に手術も終わり、家庭菜園も再開される歌も有り、作歌の方も頑張ってください。

◆佳作2 「きれいな色に」

・ひとり居の会話なき日々を脱け出して老いて元気な仲間と出会う

【評】八十歳過ぎた作者が、遺影の夫君を念じながら、元気な仲間を求めて積極的に行動される歌が多く感心しました。歳をとると人との会話を増やし、しっかり歌を作ることが肝要です。

◆佳作3 「百姓の詩2」

・朝露に濡れたトマトをほおばれば朝の涼しさ身体に沁みる

【評】日々の生活感のある歌が多く素晴らしい事ですが、これに作者の感情の表現を加えると、まだまだ良い歌が出来ると思います。

◆佳作4 「十三夜の月」

・台風の前は夜更けに強まりて稲を案じつつ雨音を聞く

【評】臨場感のある歌が並び良かったので佳作に選びました。作者の気持ち、もう少し歌の中へ入れるともっと良くなります。

◆佳作5 「孤独な日々」

・六十五年住み慣れし家を空ける時一人身の辛さ胸を突き刺す

【評】歳を取ってからの一人住まいの苦衷を詠った歌が並んでいるが、目を明るいう方へ向け
て孫の歌など作ると、気分も楽しくなります。

〈ジュニアの部〉

今年は四十五名の応募があり、どの歌にも真剣に考えた跡がうかがえて、気持ち良く選歌
が出来ました。

◆佳作1 「泳ぎきったよ五十メートル」

・記録会ドキドキしたががんばって泳ぎきったよ五十メートル

【評】記録会に出場した時の気持ちの変化する状況を、上手くまとめて最後の歓喜へもって
いったのは上手でした。

◆佳作2 「ぼくのしごと」

・クローンを二十五メートルおよげたんだととてもうれしかったよ

【評】自分の気持ちを素直に表現したのが良かった。「ととてもとても」力よく言ったの
が効果的でした。

◆佳作3 「祖母のジュース」

・ちようちんの下でみんなと盆おどり心を一つにリズムをきざむ

【評】盆おどりの情景をうまくひょうげんしており、心を一つに「リズムをきざむ」と上手にまとめてあり良かったです。

◆佳作4 「ぼくのがんぼり」

・大すきなぼくのかぞくはたからものねつがでたときたすけてくれる

【評】日常生活の中から、自分の心にあるものを引き出して、短歌に作ったことは素晴らしいことです。「ぼくのかぞくはたからもの」が秀逸でした。

◆佳作5 「無題（部活動）」

・暑い中運動場で汗流し飲み干した水努力の味だ

【評】部活動に切磋琢磨している作者の姿が、どの歌からも感じられて、感動がこちらへも伝わってきます。この調子で歌も作り続けてください。

俳句

入選

秋の蛇

西田利宏

曼珠沙華迎れば古き径ばかり

産土にアマテラス石くずかずかづら

秋刀魚焼く匂ひ彼方に誕生日

とんぼうの群れて明日の畝立てる

村といふ柩静かに蚯蚓鳴く

川越へて学校小さく萩の風

石垣は神の隠れ家秋の蛇

昼酒や腕に紫斑の里祭

秋の空震への止まぬ長梯子

いちにちの余白にぼろり零余子かな

佳作

無題（ビー玉も）

雪代
灯

ビー玉も恐れる走る浮かれ猫
ビー玉の輪郭溶かす春夕焼
ビー玉や逆さに映る雲の峰
ビー玉を握りしめてる三尺寝
茄子の馬ビー玉一つ供にする
秋雨やサツシの溝のビー玉を
大寒や石段落ちるビー玉を
ビー玉に惑わされてる鬼は外
書き初めや先ずビー玉に墨がつく
ビー玉を宝物だと春着の子

佳作

父卒寿、母米寿を言祝ぐ

熊代一紀

雑煮食ふ父に漢方四袋
末吉や孫の届くる初神籤
老父母に運ぶ夕餉の蜆汁
初つばめ老母の生家倒さるる
歩行器も父も出てこぬ酷暑かな
血圧を診る腕細し蔦紅葉
孝行も辛きときあり石榴の実
遺言の封をためらひ年の暮
シニアカーの父が手を振る小春風
三つ目の病名母は餅丸め

佳作

仕来り習ふ

田井芳枝

蚊に追はれ蚊を払ひのけ庭仕事

心配して見れば南瓜は草の中

夏雲や新鋭現る大相撲

雲の峰買ひ物バスの窓越しに

炎昼をふつとかき消ゆ白日傘

あれ蝉も昼寝でせうか午後三時

免許返納バスを待つ身の炎天下

スナフキンそこに居さうな夏木立

古参から仕来り習ふ地藏盆

七夕や地上は令和米騒動

佳作

茄子の花

山中節江

願いごとひとつ忘るる初詣

ひとり居や元旦のみの大家族

着膨れて両手につつむ筒茶碗

利休梅明日にはあすの風が吹く

休日も粧ひてをり福寿草

究めたきこと多くある彼岸かな

表札の消えゆく文字や露時雨

自転車も終りの齡茄子の花

何もかも遺されてをり立葵

憂きことも佳きこともあり秋夕焼

佳作（ジュニアの部）

無題（シャボン玉）

佐倉真愛

シャボン玉私の気持ちも飛んでゆく

紫陽花の雫がおちて朝もよう

風鈴のリンリンリンと寝る日かな

天の川願いを込めた一枚に

紅葉散る寂しさともに落ちにけり

佳作（ジュニアの部）

無題（暗い森）

瀬川佳那

暗い森ポツポツ光る夏の夜

夕暮れに赤く染まったトンボ飛ぶ

桜散り新生活が顔を出す

すすんでも同じ景色つまらない

夏祭りゆかたの袖が風を切る

佳作（ジュニアの部）

無題（短冊に）

中山華来

短冊に願いを込めた七夕の日

カーネーション母に送るプレゼント

夏祭り夜空に花が咲きほこる

ミンミンとせみが一人で大熱唱

ゆれる黄色ひまわりの黄色がゆれている

佳作（ジュニアの部）

無題（夏の夜）

横張海夢菜

夏の夜光る蛍を見つめてた

夜の空花火見ながらつぶやいた

梅雨の時期耳をすませて音を聞く

薔薇の花鼻腔くすぐるフワフワと

儚く散っていくひらひら散っていく桜の花

選評

俳句 石井宏幸

選者を務めさせていただき三年目となりました。ジュニアの部の応募がありましたことを非常に喜んでおります。やはり思いましたのは、備北の里の自然や、家族を含めた地域の人との繋がりに深く根ざした、しみじみと染みて来るような洞察とその温もりでした。ジュニアの部を含めてご注意いただきたいのは、より佳い句にと推敲を重ねてゆく過程で、季節や季語が思わず欠落し、俳句にとつとでも大切な季感を失うことです。

◆入選「秋の蛇」

題を「秋の蛇」とした

石垣は神の隠れ家秋の蛇

の句。自らの在り処を自負をもって神の隠れ家とされたのではないか。蛇の神性を己が身に引き付けて詩として昇華した佳句。

村といふ枢静かに蚯蚓鳴く

枢の一字と心象的季題である蚯蚓鳴くが響いて、冷やかに己が命を見据える確かな目を思

わせる一句。

川越へて学校小さく萩の風

は三段切れと、小さくがどこに掛かるかが曖昧な句。要推敲。

◆佳作「無題（ビー玉も）」

ビー玉や逆さに映る雲の峰

入選の句群と遜色ない句群。一年を通じてビー玉をテーマに作句された統一感が秀でてい
る。その中でも、小さいビー玉の中に空を持ち込む感性を感じた句。

ビー玉を握りしめてる三尺寝／ビー玉に惑わされてる鬼は外

送りの「てる」を「いる」あるいは「たる」に置き換えることで格調高くなります。鬼は外
の措辞は、鬼やらいとされてはいかががでしょうか。

◆佳作「父卒寿、母米寿を言祝ぐ」

初つばめ老母の生家倒さるる／三つ目の病名母は餅丸め

初燕も餅も、母に繋がる大切なものとして胸に響いてくる。

◆佳作「仕来り習ふ」

炎昼をふつとかき消ゆ白日傘／スナフキンそこに居さうな夏木立

眩しさに消えゆく白日傘と、夏木立のすつくとした有り様を感覚鋭く表現された。

◆佳作「茄子の花」

着膨れて両手につつむ筒茶碗／表札の消えゆく文字や露時雨

どちらの句も無駄な言葉が無く、写生がよく効いて、映像が鮮やかに立ち上がる。

〈ジュニアの部〉

◆佳作「無題（シャボン玉）」

紫陽花の雫がおちて朝もよう

朝模様の言葉と雫のきらめきが美しい。どの句にも詩情と作者の感性を感じた。

◆佳作「無題（暗い森）」

桜散り新生活が顔を出す

新生活への期待と心の張りを桜で表現した。

◆佳作「無題（短冊に）」

夏祭り夜空に花が咲きほこる

咲き誇るとの言葉が花火の迫力を伝える。

◆佳作「無題（夏の夜）」

梅雨の時期耳をすませて音を聞く

降り続く雨音や、雨上がりの風音に耳を傾る作者の姿が見えて来る。

川柳

入選

三回忌 大久保妃佐子

空っぽの三回忌来る 風が鳴る

ありのまま意味のとおりの冬の朝

言わないで比べないでと下を向く

夕空の茜不安をにじませて

忙しなく過ぎて手ごたえ無き日々は

しんと朝一人だったとまた思う

一区切りと思えばひとときわ青い空

溜息を杖に背をのしまず一歩

補聴器はいておらずをはずせば静まる私語

執着の色か紅葉は照り映えて

佳作

余生

山中節江

控えめにゆつくり歩む橋渡る

未来図も描かず流れのまま生きる

丁度良い陽だまり心身共に干す

遠まわりして暖かい風に逢ふ

字余りの余生を生きる九十路

責任は持てない老後の設計図

限界も知らず生涯現役に

人生を紡ぐ縦糸太くする

ケータイが耳打ちしている昼下り

残る日を歩いてくれる靴を買う

佳作

八十路の日々

橋本宏子

今日からは下り坂とや八十路坂

八十の路静かに下ろう終わりまで

立つ座る度に「どっこいしょ」八十路日々

のろのろと徒歩も車も八十路われ

一人居でおせちも餅も買うた物

母からの遺伝子たしかに腰曲がる

先に逝った後輩あの世じゃ先輩か

辞書事典すべてスマホで間に合わせ

桜もち葉より花びらで巻いて欲し

今朝の冷え立冬前でも師走なみ

選評

川柳 前田一石

「嘘のような本音はいいが、本当のような嘘を句にしてはならない」大先輩からよく言われたことである。自分を詠う。自分を句にする。暮らしを表現する。句を創作する上で一番重要なことである。面白い句、機知に富んだ句。社会風刺もそうだが、自分の想いが込められているか、五・七・五のリズム感はあるか等々、言葉に制限はないと言われる川柳にも、使ってはならない言葉もある。

最近は特に作りやすさも加わって、イベントや、各種のスポーツ大会などへのいわゆる「募集川柳」が盛んに発表され、結構な応募者数を占めているようである。分類するわけではないだろうが、各分野で様々な川柳句が発表されている。これも川柳、あれも川柳、状態である。川柳はあくまでも「短詩の文芸」である。忘れてはならないことだと、私は常に自分に言い聞かせている。

今年の入選作品でも、自分を見つめる目の確かさと不安、迷いが読者に訴えてくるし、佳作二編にもそれぞれの想いや見方が、秘められていて、鑑賞することのうれしさを思った句群である。

◆入選「三回忌」

- 空っぽの三回忌来る 風が鳴る
- 忙しなく過ぎて手ごたえ無き日々は
- しんと朝一人だったとまた思う
- 一区切りと思えばひときわ青い空
- 執着の色か紅葉は照り映えて

「もう三年も過ぎているのに」「まだ三年なのに」という、時間的なずれや感覚はあるにしても、暮らしの中での覚悟とか、はじめはついていないのである。長年の生活の変化への驚きであり、あえて振り切ろうとする様が、寂しさを生む。句の完成度から言えば少し不満だがかえって想いが伝わってくる。

◆佳作「余生」

- 遠まわりして暖かい風に逢ふ
- 責任は持てない老後の設計図
- 残る日を歩いてくれる靴を買う

しっかりとした句群である。「余生」。なんと哀しい言葉ではないか。いつからか、どこから「余生」なのだろうと思ひながら、読ませていただいた。この句群はまだまだ現役で生きてやるぞ、との思いが伝わってくる。

特に「残る日を……」の句は、前を向いて生きようとする意欲が秘められた佳句である。私の「余生」は？と、ふと思った。

◆佳作「八十路の日々」

○今日からは下り坂とや八十路坂

○八十の路静かに下ろう終わりまで

○母からの遺伝子たしかに腰曲がる

自分の「今」を正直に描いている。生きてきた喜びであり、暮らしの波に流された哀しさを振り切ったの生き様を「さりげなく」詠っている。句にぎこちなさを感じるが、想いが充分伝わってくる。

小説

入選

五百年の時空を超えて

秋月皓淳

雪の中でみんなが消えた

おばあちゃんの四十九日の法要が新見であった日は朝から大雪だった。ユカリたちは前の日からお母さんの実家に泊まっていたのでよかったが、その日は特急やくも号が雪のため運休止、親せきのおばさんたちは間にあわなかった。

お寺に家族が集まった。お坊さんがお経をとなえ、みんながお焼香した後、お墓まで歩いていくことになった。お墓は裏の山の麓にある。雪が積もっていて歩きにくいけれど、お墓におばあちゃんのお骨を納めないと四十九日の法要が終わらない。みんなはだまってお墓への道を登っていった。

そのとき、不思議なことが起こった。

なにか、たくさんの生きものが、空の上で群れをなして、鳴きながら、ぐるぐる飛びまわり、たちまち空が曇って、雪が舞いおりにきた。あたりが暗くなる。ユカリの前を歩いているお母さんの姿がふわっとゆがんで見えなくなった。アキラがさげんだ。

「お母さんがいなくなっちゃった！」

「お母さんが？」

「みんなも、いないよ」

あたりにはだれもいなくなっちゃって、ユカリとアキラと二人だけになっていた。

アキラが山道の上の方を指さした。

「おねえちゃん。見て！」

山道を登った先に、小さなお堂が雪にうずもれているのが見えた。

「なんだろう、あのお堂は？」

お堂のほかにはなにも見えない。人影もない。雪の中にぼつんとお堂が立っているだけだ。お堂の雪のボウシのような屋根が、ちょうどそこだけが太陽の光線を斜めに受けて、きらきら光っていた。

「おねえちゃん、行ってみよう」

アキラが急に駆けだしたので、ユカリも駆けだした。二人は白い息をはずませて山道を登った。

お堂は赤い夕陽の色に染まっていた。

静かだった。

お堂の中からなんの物音も聞こえてこない。ユカリとアキラは、お堂の戸口に立って、中をうかがった。

静かだった。

しかし、お堂の中にだれかいるような、そんな気がして、ユカリとアキラは顔を見あわせた。

「入ってみる？」

「うん、入ってみようか」

ユカリは戸口の板戸に手をかけた。

「こんにちは」

お堂の中はしーんとしている。

「こんにちは」

ユカリがもう一度言った。

「……お入り」

確かに、中から、声が出た。

「お入り」

今度は、はっきり聞こえた。ユカリはアキラの手を引っぱった。アキラがユカリの手を引きもどした。

「おばあちゃんだ」

「えっ？」

「わからないのかい。あの声はおばあちゃんだよ」

そう言われると、ユカリも、お堂の中にいる人がおばあちゃんのように思えてきた。でも、どうして、死んだおばあちゃんがこんなところにいるのだろう。

「さあ、中にお入り」

お堂の中から、はっきりした声が、二人を呼んだ。

アキラが先に戸を開けた。

「おばあちゃん」

ユカリも首を突っこんだ。

そこには焚き火が燃えており、とても暖かそうだった。

戸口から射しこむ外の光が煙の中に斜めに筋

を引いて、焚き火の向こうに座っている人物を照らした。

そこにいたのは、おばあちゃんではなかった。年とった女の人で、うす汚れた着物を着て、首に大きな数珠をかけ、頭はというとうと、ぼうぼうの白い髪の毛が顔を隠すほど垂れさがっている。その女の人が優しく言った。

「中に入って、戸を、お閉め」

ユカリとアキラは中へ入って、言われるままに、戸を閉めた。

女の人は木の枝を焚き火の上に投げた。火がぱちぱちはじけた。女の人がゆっくり顔をあげた。

「あ、おばあちゃん」

ユカリとアキラが同時に声を出した。

「まあ、おすわり」

ユカリとアキラは焚き火のこっち側に腰をおろした。女の人は、また、小枝をひとつかみ火の中に投げ入れた。そして、ユカリとアキラにやさしい笑顔を向けた。

「わたしは、おまえたちの、おばあさんではな

いよ」

「じゃあ、だれ？」

「そうさね、おまえたちの、おばあさんの、おばあさんの、そのまた、おばあさんの、またまた、おばあさん……」

わけがわからない。

「ほっほっほ、わかるまいのう。わたしは、五百年もむかしの、古い古い、おばあさんなんだよ」

でも、ユカリは、女の人が恐い、とは思わなかった。それがちよっと不思議だった。

「ユカリ、まだ、不思議に思っているね」

急に言われて、ユカリはびっくりした。どうしてわたしの名前を知っているんだろう？

「アキラ、おまえは、素直な、いい子だね。もう、わたしを信じているよ」

ユカリは、やっぱり、驚いた。この人はアキラの名前も知っている。きつと魔法つかいだわ。でも、本当に魔法つかいなんているのかしら？ 「ユカリ、わたしは、おまえが考えているような、魔法つかいじゃあないよ。ただの『うらな

い婆（いばば）』だよ。五百年も生きてきたから、むかしのことも、今のことも、どちらも知っている」

「五百年も生きていて、ですって！」

「そうだよ。五百年も生きてきたんだ」

アキラがたずねた。

「死ななかったの？」

老婆は、ユカリとアキラに言い聞かせるように、ゆっくり話した。

「わたしは、たぶん、死なない。これから、また五百年、生きなくてはならないだろう。わたしが、もう世の中を見たくない、と思っても、いつまでも、世の中を見つづけなくてはならないだろう。人の世の、無常を、ね」

ユカリは老婆の悲しそうな目を見た。

「わたしは、長い間、戦争ばかり見てきた。人が人を、たくさん、殺すのを、たくさん、たくさん、見てきた。どうして、人は人を、殺すのだろうか」

老婆の言うことは全部はわからなかったが、この人が、ユカリが考えることもできないほど、

長く辛い時代を生きてきたことは、わかるような気がした。

アキラが、また、たずねた。

「ずっとおばあさんのままでいるの？」

「ほっほっほ。わたしにも、若いころがあったよ。五百年前は、ね」

五百年前、このおばあさんはどんな女の人だったのだろうか。

「おばあさん、あなたは、だれなの？」

「わたしが、だれか、だって。ほっほっほ。名前を言っても、わからないだろうね。じゃあ、おまえたちに、わたしの、五百年むかしの姿を、見せてあげよう」

自分を『うらない婆』と言った女の人は、かたわらに置いていたものを取りあげた。

「これは『鼓』だ。知っているかい？」

ユカリは知っていた。テレビで見たのだが、歌舞伎や能や、古い日本の音楽では、よく使われる楽器だ。まん中が細くなった木の筒の両側に動物の皮が張ってある。皮の部分を手でたたいて鳴らす。

『うらない婆』は鼓を左手に持ち、右手を高
くあげ、振りおろした。

「ああらな、おんから、おんから」

鼓は思いがけなく高い音で「ほん、ほん」と
鳴った。

「ああらな、おんから、おんから」

ジユモンのような、へんてこな声をあげて『う
らない婆』は鼓を打った。白い長い髪を振りみ
だして、一心に祈った。

焚き火の炎が、突然、ごおっと、燃えあがっ
た。お堂が炎に包まれ、ぐらぐらと揺れた。『う
らない婆』が燃える火の中に消えていった。ユ
カリたちも燃える火に巻きこまれそうになった。
「アキラ。逃げよう！」
「うん。脱出だ！」
アキラが先に外へ飛びだした。ユカリも続い
た。

ここはどこ？

外は、とても明るかった。

まるで突然、夕暮れから真昼になったみたい
だ。

振りかえると、そこに、お堂はなかった。

「お堂が消えた」

「ほんとか。変だなあ。おばあさんも、消えた
んだらうか？」

そのとき、二人は、同時に、気がついた。ユ
カリもアキラも古めかしい着物を着ているのだ。
「ワッ！」

「なんで？」

テレビの時代劇に登場する農民のような、変
な姿に変身している。

「わたしたち、自分で着がえたわけじゃない。
なにかの力が働いたのよ」

「タイム・スリップしたのかな？」

「タイム・スリップ？」

「あのお堂は、タイム・マシンだったんだよ。
きつと」

「そうかな？」

「絶対、そうだよ。ぼくたち、いきなり変身し

たんだ。タイム・マシンでタイム・スリップしなきゃ、こんなことにならないよ」

「そうかも。なにか特別な力が働いたんでしよう。わたしたちが知らない、異次元の世界へ来てしまったんだ」

「おねえちゃん。どうする？」

「人がいるところへ行つて、たずねてみよう。ここが、どこか、どんな時代なのか」

「わかった」

ユカリとアキラは山道をくだっていった。

だんだん村に近づくのと、やつぱり、とんでもない世界に来たことがわかった。

村は大むかしの村だった。どの家もワラか草を屋根にのせた粗末な小さい家だ。木の枝かカヤの束が板切れで囲った、まるで家畜小屋みたいな、粗末な家ばかりだった。

そして、なぜか、人の姿はどこにも見えなかった。

山道をくだると、山の麓に、お墓があった。アキラが、ユカリの手を引っぱった。

「あそこ。だれかいる」

見ると、女の人がお墓の前にひざまずいている。昔風の着物を着ている。髪型もちがう。長い黒髪を首の後ろでくくって背に長く垂らしている。

その女の人の横顔が見えたとき、ユカリもアキラも「あつ」と言った。

「おかあさん」

「おかあさんだ」

女の人がゆっくり立ちあがって、こつちを見た。その人は、お母さんによく似ていたけれども、お母さんより若かった。

ユカリは勇気を出してたずねた。

「あの、ここは、どこですか？」

しかし、女の方はなにも言わなかった。

「わたしたち、迷子になったみたいなんです」

ユカリがそう言って一歩前に出ると、女の方はユカリとアキラを見つめたまま、まるで年寄りみたいな低い声で、ゆっくり言った。

「わけありのようじゃな。こちらへ、おいでなされ」

とてもむかしの言葉づかいに聞こえたが、ユ

「行こう」

「うん。わかった」

アキラがユカリの手をにぎりかえしてきた。

使者が到着した

お墓から村の中心まで歩いてくだるのに五分もかからなかった。

ユカリたちが村のもっとも高いところにある家に着いたとき、田んぼ二枚ほど隔てた、二段下の大きな建物に人がたくさん集まっているのが見えた。馬に乗った人もいた。その人たちは長い刀を腰につるしている。ひと目で、身分が高い人だ、とわかる。大きな建物の広い前庭が人でいっぱいになった。ひとしきり混雑が続いた。

ユカリたちが詳しい事情を知ったのはずっと後になってからだだったが、この時の出来事は、京(みやぎ)のお寺さまからつかわされた使者が到着した——という、新見庄(にいみのしょう)の百姓た

ちにとつて大事な出来事だったのだ。

ともあれ、この出来事のおかげで、ユカリたちは見とがめられないですんだ。

ユカリとアキラが入った家は、まわりの家よりずっと大きくて、壁は板壁だったし、屋根も厚い板を並べて作つてある。家の敷地は土塀に囲まれていて、特別な家だとわかった。

家の中はかなり暗かった。入口に近いところは広い土間だった。一段上がった部屋の床は板張りだったが、畳は敷いてない。障子や襖もなかった。

二人がぎよろぎよろしていると、いったん奥に入った女の人が出てきて、言った。

「お腹がすいてはおらぬか？」

女の人は、木でできた丸い器に食べものをひとすくい入れ、二人に渡した。

「めしあがれ」

二人は板の床に並んで腰をかけ、ご飯みたいなものを、箸がないので手でつまんで、口に入れた。米を炊いたものようだが、干からびていて、すこしも軟らかくない。食べものなんだ

から、よく噛めばいいんだろう、と思って、しばらく噛んでいると、米の粒が軟らかくなつてきて、香ばしい味が口の中に広がった。

「ごちそうさま」

「ごちそうさま」

二人が食べ終わると、女の方はすこし厳しい顔つきになつて言った。

「やがて、お屋形さまが、おもどりなされる。

そなたたちのことは、わたしがよしなに取りなすゆえ、案ずるでない。ただし、わたしがお屋形さまに話す間、そなたたちはひとこともものを言うでないぞ。よろしいな」

ユカリはうなずいた。アキラもコクンと首を振った。

夕暮れが近づいたころ、お寺さまからつかわされた使者をもてなした、お屋形さまが帰つてこられた。女の方は、お屋形さまにユカリとアキラを引きあわせ、二人を屋形に住まわせてもよい、と許しをもらつてくれた。

この時はじめて、女の方が「たま」という名前であることがわかった。そして、お屋形さまは「福

本」どので、たまさまの実の兄ということもわかった。

その後、奥方さまからも「ここに住むがよい」と許しをいただいた。奥方さまは、たまさまがお墓で言ったのと似たような、話をしてくださつた。

「わたしの娘と息子は、思いもよらず突然に病で亡くなつてしまった。生きておれば十二と十。そなたたちと、ほぼ同じ年ごろじゃ……。さてさて、そなたたちがこの屋形に来たのは、まつこと、不思議な因縁に導かれてのことであろうかのう」

その夜からユカリとアキラは、屋形のすみっこにある粗末な小屋で寝ることになった。土の上に柱を立て、板で四方を囲つただけの小屋だ。土の上にワラが置いてある。そのワラにくるまつて寝るのだ。アキラは「ひでえところだな」と口をとんがらせた。でも、がまんするしかない。ところが、ワラにくるまつていると、思ったより暖かい。ワラの香りに包まれて、いい気もちになつてくる。アキラが「アア」と、大

あくびをした。

いつの間にか、朝になつていた。

いきなり小屋の戸を開けて、女の子が入ってきた。アキラと同一年くらいだ。ユカリとアキラはびっくりして目を覚ました。女の子は、ユカリとアキラがワラから出るのを見とけると、さつさと引きかえしていった。

「朝ご飯だよって、呼びにきたのかなあ」

アキラがのんびりした声で言った。

ふたたび小屋の外に人の気配がしたので、戸を開けると、さっきの女の子が立っていた。

「ご飯なの？」

アキラがたずねた。女の子はなにも言わない。

ユカリもアキラも、ともかく、小屋の外に出た。

女の子はなにも言わず背を向けて歩きだした。

二人は付いていった。お屋形にはいくつかの小屋があつて、そのうちの一つに女の子が入った。

中に色々道具が置いてある。女の子は二人に竹で編んだカゴを渡した。背おいカゴだった。二人はカゴを背おった。次に、女の子はカマを二

つ差しだした。これで、朝ご飯の前に草刈りをするしなければならないことがわかった。

女の子が先に歩きだした。お屋形を出て、村を抜け、どんだん山道を登っていった。ユカリもアキラも女の子について山道を登った。ワラぞうりなので道の草にたまった朝露が裸足の足を濡らし気持が悪かった。それどころか、しばらく山道を登っているうちにワラぞうりの鼻緒がすれて血がにじんだ。

松の木がたくさん立っているところまで来て、女の子は足を止め、カゴをおろすと、そらの草を刈り始めた。小さいのに慣れた手つきだ。

ユカリとアキラは女の子をまねてカマを使つてみた。草がザクザク切れた。

背負いカゴがいっぱいになると、三人は山をくだった。屋形に帰りつくと、刈ってきた草を馬小屋に運んだ。

その後でやっと朝のご飯にありついた。

たまさまがユカリとアキラにお粥が入った木の器を渡してくれた。それは米の粒などほとんどない、芋かなにかが入っただけの、とてもま

ずい食べ物だった。

食べ終わると、すぐ次の仕事が待っていた。馬と牛に与えるエサを刻む仕事だ。刈ってきた草と干したワラを細かく刻む。女の子のやり方をまねて、ユカリもアキラもケガをしないよう注意して、手を動かした。

それが終わると、また山へ出かけた。今度はシバを刈るのだ。山の中腹の低い木の枝を小さなナタで切りとり、ほほ長さをそろえて束ね、背負子で背おって運ぶ。背負子いっぱい荷を「いっか」と言うが、「いっか」のシバを刈るのに長い時間がかかった。刈ってきたシバはしばらく乾かしておき、焚き木として飯炊きなどに使う。

昼ご飯はなかった。朝、お粥を食べただけで、夕方まで働き続け、「三か」のシバを刈って、お屋形まで持ち帰った。

夕方、お屋形に帰ってくると、暖かいご飯を食べさせてもらった。でも、米ではない、なにか米に似たものがまじっているご飯だった。おかずは塩からい菜っぱの漬物だけ。しかし、ユ

カリもアキラも腹いっぱい食べた。

その日、ユカリとアキラは、女の子が「あや」という名前で、福本のお屋形の前に捨てられていた捨て子であることを知った。あやは、米がでぎず食べるものがなくなる恐ろしい飢饉の年に生まれた子で、親が田も家も捨てて他国へ逃げるとき、連れて行けず置いていった子だという。ユカリもアキラも食べるものがない、という経験をしたことがない。だから、飢饉と聞いても、どんなにひどいことなのか、本当はわからなかった。

こうしてユカリとアキラの新しい世界での毎日が始まった。

福本のお屋形に暮らすようになって一か月ほどたった、ある日の夕方、シバ刈りから帰ってくると、たまさまがユカリに言った。

「手つだっておくれ」

ユカリは「はい」と返事して、たまさまに従った。お屋形の台所から政所まんどころへ食事を運ぶのである。お屋形から政所までは田んぼ二

段を隔てているだけで、温かい食事が冷めないうちに運べる。たまさまは箱膳を、ユカリは熱々の鍋を両手に持って、田のあぜ道を歩いていった。

政所には使者どのが待っていた。年齢は何歳ぐらいだろうか、お屋形さまよりかなり年上だろう。背が低く、小ぶとりで、顔も丸っこい。目が細く、ユカリにはズルガシコイおじさんに見えた。

使者どのは了蔵(りようぞう)という名だった。了蔵どのがなぜ新見庄にやって来たか、その経緯(いきさつ)をユカリが知ったのは、実際はかなり後だったが、おおまかに言うと、京のお寺さまから直々に新見庄へ派遣される代官がまだ決まらなかったの、先に使者を送りこみ、このところ何年も年貢が納められない状況を「調べてまいれ」と命じられたからだ。了蔵どのは僧ではなく寺の使用人だった。

季節は実りの秋。田んぼでは百姓たちが黄金色の稲穂を刈りとり、ハデ杭にかけている。天日で乾かし、乾いたら脱穀する。これで一年分

の米の収穫が終わる。

ユカリは、今年が豊作だったらしいのに、と思う。

またしても武家代官が

ユカリとアキラが五百年むかしの新見庄へタム・スリップして二か月が過ぎようとしていた。

秋がどんどん深まって山々が黄や赤や茶色に変わってきた。そんなとき、新見庄に一大事が持ちあがった。

今年、田んぼのある場所によって米の出来がずいぶんちがった。「川流れ」と言って、夏の大雨で大川が増水し田んぼが水びたしになったところはほとんど稲が実らず、その田の所有者——百姓の中でも「名主(みやうしゅ)」と呼ばれる有力者——は「年貢を納められません」とお役人に泣きついてきた。お役人たちはお寺さまの使者了蔵どのに「年貢を免除してもらえないか」

と頼んだ。了蔵どのは「お寺に直接訴えるか、代官が決まり新見庄に着任されるまで待つか、どっちかじゃ」と、逃げた。

それにつけこむように、以前新見庄の代官だった有力な武家が「寺から代官が派遣されぬなら、わしがふたたび代官になってやろう」と言ってきた。

さあ、一大事。

この武家は新見庄の代官であった数年間、年貢米を横どりしてしまい、お寺さまへはまったく納めなかった。そのような武家がやってきたら大変だ。お役人たちは集まって相談した。お役人たちがたどりついた結論は「武家代官は拒否する。お寺さまへ再度、直務代官の派遣を強く要請する」だった。お役人たちはすべての名主たちに呼びかけて大寄合を開いた。大寄合の場所は江原八幡宮（こうばらはちまんぐう）。時は夕刻。八幡宮と隣りあわせの善成寺（ぜんじょうじ）から大鐘をつき鳴らす音が響いてきた。村人たちは、川向こうの山すそに見える八幡宮の森から立ちのぼる火と煙を眺めながら、「またしても大事じゃ」

と、ひそひそ声で話した。

そのとき福本のお屋形にいたのはたまさま、ゆいばあさん、あやとユカリの四人。たまさまがたずねた。

「あきらがおらぬが、どうしたのか？」

ゆいばあさんが答えた。

「八幡宮へ行ったんじゃないろう。わしが、ほれ、見てみい、大寄合があるぞ、と言うたら、すつとんで行きよったけえ」

「子どもの身であのような場所へ行くのは危ないではないか。どうして止めなかった」

「止めるもなんも、猿のように駆けだしたぞな」

「そうか。では、あきらが無事にもどるまで、みな、ここで待っていきましょう」

それから一時間ほどたって、アキラがお屋形にもどってきた。ユカリはどんなにホツとしたか。

たまさまはアキラにきつく言った。

「わたしの許しなく、遠出してはなりませぬ」

アキラは、まっ赤な顔をして、言いかえした。

「でも、どうしても見ておきたかったんだ」

「理由はなんであれ、いけませぬ」

「新見庄の大事件だよ」

たまさまが折れた。

「よろしい。今回だけは許しましょう。それで、あきらめはなにを見たのですか？ 話しておくれ」
アキラが得意げに語ったのは次のような光景だった。

江原八幡宮に近づくと、境内では多くの篝火（かがりび）が焚かれ、槍や太刀や長刀を持った百姓たちが群れをなして集まってきて、お屋形さまはじめ莊園のお役人たちを取り囲んだ。みんな、てんでにさけんでいた。

「わしらの領主はお寺さまじゃ！」

「お寺さま以外の領主は持たぬぞ！」

「武家代官を入らせるな！」

「やつらを新見庄から追いはらえ！」

その声はほとんど激しくなり、おしまいには八幡宮の森をゆるがすほどになった。

「えい！ えい！ おーっ！」

アキラの語りは熱くなってきた。福本のお屋形さまが登場する場面になると、さらに熱を帯

びる。

「お屋形さまはかつこよかった。みんなの前に出ると、両手をあげて、静かにするよう言った。みんなは静かになった」

お屋形さまの声は八幡宮の森を越えて遠くまで響いた。

「これまで何度もお寺さまへ代官を派遣してくださるようお願いましたが、われらの願いを聞いてくださらなかった。その際に武家が新見庄に入ろうとしている。だが、われらは負けてはならない。武家をやつつける力がわれらにあることを、お寺さまに見せつけようぞ。われらは負けない！ 勝つ！」

「おーっ！」

「おーっ！」

「おーっ！」

八幡宮の森は篝火と百姓たちの喚声で燃えあがるようだった。

アキラは、そこまで語って、帰りに政所の庭で見た了蔵どののようすを話した。

「とてもあわてていたよ。門を出たり入ったり。

お百姓たちのすごい力を見て驚いたんだろうな」
ユカリはアキラの話の聞いて、アキラが急に成長したように思った。タイム・スリップしたら時間も早く進むのだろうか？

もう一つ思ったのは、たまさまがとても冷静だったこと。お屋形さまの活躍ぶりを聞いても表情を変えなかつたし、了蔵どののあわてぶりにも驚かなかつた。たまさまは今の状況をわきまえているみたいだ。もしかすると、お屋形さまより冷静かもしれない、と思った。

その後の、ゆいばあさんの情報によると、福本のお屋形さまからお役人はお寺さまへ手紙を書いて「一日も早く正式な代官を派遣してほしい」とお願いした。しかし、一月たつても二月たつてもお寺さまからは返事が来ない。百姓たちの大寄合は武家を追いはらう力があつたのに、残念ながら、お寺さまにはちつとも届かなかつた。お屋形さまたちは「なんでお寺さまはわたらの言うことを聞いてくださらぬのか」と嘆いた。

そうして時は移り変わり、晩秋の空気がだん

だん冬の冷たさをはらんできた。

十二月の初め、新見庄に初雪が降つた。

一面の銀世界を眺めながら、ユカリは久しぶりにお母さんを思い出した。新見のおばあちゃんのお母さんの四十九日法要のとき、前を歩くお母さんの黒服の肩に白く雪が積もつたのを思い出した。お母さんに会いたい。この気持ち、今のアキラには伝わらないだろうな。アキラは新見庄の生活にすっかり慣れたよう、毎日、あやといつしよに草刈りやシバ刈りに出かけ、飯時にはいつも「腹へつたあ」と言つてお椀二はい、しつかりおかわりする。たまさまに言いつかつて使い走りをする。たまさまと話すのを聞いていると、おとなびた言い方をするようになった。背はちつとも伸びないが、顔つきが締まつてきたように思う。アキラは成長している。それに比べると、ユカリは自分が成長していないように感じる。新見庄にタイム・スリップした、あの日、時間が止まつてしまつたのか？ このまま五百年むかしに閉じこめられて脱出できないのだろうか？

本物のお代官さま

お正月、桃の節句、端午の節句、田植えと季節はめぐり、ユカリとアキラが新見庄で迎えた二年目の夏、長い梅雨と増水により田が流失した。そして皮肉にも、その後の日照り続きで田が干上がり、この年も稲の出来は悪かった。お寺さまの使者了蔵どのがいくら催促しても百姓たちは年貢米をなかなか納めなかった。了蔵どはお寺さまへ「代官を派遣してください。さもないと百姓は年貢を納めません」と手紙で訴えたが、はつきりした返事はもらえなかった。莊園のお役人がたも重ねてお寺さまへ手紙を書き送ったけれど、だめだった。

ところが、八月の終わりになって、本物のお代官さまが二人の従者をつれて新見庄に着任された。

さあ、大変だ。

政所を取り仕切る福本のお屋形さまは女たち

に命じて寝所を整えさせた。北側の別棟べつむらに了蔵どのと従者二人の部屋を新しくこしらえ、了蔵どのの寝ていた広間をお代官さまの寝所に模様かえする——などの準備を、たまさま中心に、短い時間で終えた。

ユカリは、たまさまの働きぶりをみて、あらためて感心した。アキラも同感だったようので、しきりに「たまさまは、やっぱり、すごいなあ」と口にした。

お代官さまが政所に入られた初日は無事に終わり、すべてを指揮したお屋形さまはホッと一息つかれたようだった。

しかし、翌朝、お役人がた三人がお代官さまにごあいさつしたところで、お代官さまから厳しい言葉が発せられた。

「名主ら皆を政所に呼び集めなさい」

「は？ 皆を？」

「ただちに、でございますか？」

お代官さまは声をとがらせた。

「同じことを二度言わずな」

お役人がたは、仕方なく、下男げなんたちを各

地へ走らせた。その一人にアキラも選ばれ、福本のお屋形から最も近い里村を走りまわった。

新見庄は南北七里^①、東西一里もある広大な荘園だ。全地域から全名主が集まるとなると半日近く時間を要する。お代官さまは待ちきれず、機嫌が悪かった。

やつと全名主が政所の前庭に集合したのは、焼けるような日差しが頭上に照りつける真昼だった。

お代官さまの第一声が響きわたった。

「わしが東寺^{とうじ}から派遣された代官である。名は祐清^{ゆうせい}と申す。わしの言うことはすなわち東寺の命令である。一つとして背いてはならぬ。しかと心えよ」

これを聞いた名主たちは驚いた。まさか、これほど威圧的な言い方をなさるとは……。どよめく名主たちの頭の上にお代官さまの声がかぶさった。

「お寺への年貢を、決められたとおり、即刻、納めよ。滞納は許さぬ。例外は認めぬ」

名主たちはふたたびどよめいた。

「なんと厳しい代官であるか！」

「これでは武家代官と同じじゃないか」

「武家代官なら力で追い出せるが、お寺さまの代官は追い出せないのう」

名主たちの落胆がどれほど強かったか、遠くから見ていたユカリやアキラでも、よくわかった。

そうした中でも、たまさまはお代官さまを大事なお方として敬い、みずから給仕役を買って出られたのだ。

「お代官さまのお世話を下働きの女にまかせてはなりません。政所の務めを心えている、わたしにしかできない役割があります」

お屋形さまは答えた。

「うむ。わかった。お代官さまもおまえには心を許すであろう。さすれば、わしらの言い分が通りやすくなるかもしれぬのう」

またあるときは、たまさまがお屋形さまに自分の思いを告げるのを、近くにいたユカリは立ち聞きした。

「お寺さまが代官を遠い遠い備中までお送りく

ださるのには、新見庄がお寺さまにとつて重要な
莊園だと思つてくださるからです。こちらもそ
の思いにむくいなければなりません。もし、わ
たしたちがお代官さまに逆らえば、お代官さま
はお寺さまへ、新見庄の者どもは信用ならぬ、
と手紙をお書きになり、わたしたちはお寺さま
から見放されるでしょう。頼る主をなくせば、
ふたたび武家が魔の手を伸ばしてきます」

ユカリはたまさまの冷静さと思ひの強さをあ
らためて感じた。

毎日朝晩、たまさまは政所へ通つた。了蔵ど
のと従者二人の食事を運ぶのはゆいばあさんの
仕事だが、お代官さまの食事の世話のほかのだ
れにもさせなかつた。たまさまは、お代官さま
の食事の世話をする役目に加えて、政所の庶務
のお手つだいをするようになった。政所には大
量の手紙類が保管されており、お寺さまへあて
て手紙を書くとき、その中から関連の手紙を見
つけ出し参考にしなければならぬ。とてもわ
ざらわしい仕事だが、大切な仕事だ。たまさま
はそれを難なくこなした。

これまで福本家の女は代々、政所の庶務を学
んで、お屋形さまを助けてきたという。ときに
はお寺さまへの手紙を代筆することもあつた。
「お屋形さまの奥方さまはもちろんそうだが、
今は、たまさまがかわつてその仕事をなさつて
おるよ」と、ゆいばあさんがユカリに話してく
れた。だから、たまさまが毎日政所に通うのは
当然だと思ふ。

お代官さまの着任を一番喜んだのは了蔵どの
だろう。これで自分の役目は終わった、とひと
り合点あつてして、荷物をまとめたところ、お
代官さまから厳しいお叱りをちようだいたした。

「滞納の年貢の督促をやり終えてからにいたせ
了蔵どののはしぶながら莊園の奥地まで歩
いて回つた。でも、やっぱり思つたほどの成果
はあがらない。政所に帰つて報告すると、お代
官さまは声を荒げた。

「ならば年貢の算用状を書け」

了蔵どのには新見庄で一年間過ごした間に自分
が食べた米の量や借金の額も書かされた。その
うえで、了蔵どのには新見庄の百姓の実情をお代

官さまに話した。

「年貢の催促はあまり急いでやらない方がいいと思います。百姓どもはとでもしたたかですのうで」

しかし、お代官さまは激怒した。

「了蔵は農民になめられておる。覚悟が足りぬからじゃ。わしは、たとい一命を落としても、年貢を納めぬ百姓を厳罰に処す」

こんな会話を直接ユカリが聞いたわけではないが、たまさまやゆいばあさんの話から推測した。ときにはアキラから秘密情報をもらうこともあった。

お代官さまが着任なさって半月ほどたったころ、やっと了蔵どのに帰京のお許しが出た。了蔵どのは喜びいさんで出発した。

了蔵どのがいなくなった後、大きな変化があった。たまさまが政所に常駐することになり、ユカリとアキラもお屋形から政所の北隅の木小屋に引っ越したのだ。ユカリは、これまでのシバ刈りや下働きに加えて政所の賄いを手つたうことになった。ゆいばあさんが朝と夕、政所の

台所にやって来て、ユカリに一から教えてくれた。お代官さまと従者二人の食べものを作って出す仕事はなかなか大変な仕事だった。たまさまと自分たちの食事も作らなければならない。

アキラは政所の馬——お代官さまが京から乗ってこられた馬がそのまま飼われていた——に与えるエサをかき集める役目を命じられた。これまた大変な仕事だ。さらに政所の庶務を分担するようになった。たまさまに言いつかって、名主たちへ伝言を伝えるために里村を走り回った。アキラは、まるで出世したかのように、張りきっていた。

一年前に了蔵どのがしたように、お代官さまは広い荘園内を巡って、今年の米の出来具合を確認かめた。了蔵どのとちがったのは、田の所有者である名主たちに直接命令できたこと。ただちに「年貢米何貫を納めよ」と書いて渡した。代官直筆の書状であり、印まで押してある。受け取った名主は強い圧力を感じただろう。とはいっても、名主たちみんなが年貢を滞りなく納めるはずがない。あれこれ言い訳をこしらえて、

すこしでも年貢を減らしてもらおうとした。名主たちとお代官さまの駆け引きは年末を迎えても終わらない。お代官さまは経過をいちいちお寺さまへ手紙に書いて報告した。その手紙を京まで届けるのはお役人側の責任だったから、お代官さまとお役人たちの駆け引きもだんだん難しくなっていくた。

そのようなとき、たまさまは常にお代官さまの側に立って、お屋形さまに申し上げるのだった。

「お代官さまのご意向を酌んで政を滞りなく進めるのがお役人の役目ではありませんか。お代官さまに逆らうのは得策ではありません。お代官さまのお顔を立てることが、結局は、わたしたちの安泰を守ることにつながるとお考えください」

「そなたは、すっかり、代官びいきになったのう。代官は代官。あちら側の人間じゃ」

「いえ。お代官さまは立派なお人でございます。どれほど難儀であろうとも、最後までお勤めを果たそうとしておられます。わたしにはわかり

ます」

「あまり気を許すでないぞ」

「ご心配には及びませぬ」

「いや、心配じゃ」

「わたしは大丈夫です」

このように、たまさまの心はお代官さまにしないで傾いていった。近くにいたユカリには、なんとなく、わかった。

年貢を納めなかった豊岡名主

秋が終わろうとする雨の日の午後、豊岡名主が政所にやってきた。庭先に立つと、お代官さまを呼んだ。たまさまが広縁に出て応対した。

「お代官は？」

「あいにく金子さまのお屋形に出むいておられます」

「ならば、豊岡がまいったとお伝え願いたい。また明日、まいる」

豊岡名主は肩をいからせて、帰っていった。

ちようどそこにいあわせたユカリは、豊岡名主の蓑みのの後ろから長い太刀の先がのぞいているのを見つけた。なぜか冷たいものが背筋を走るのを感じた。

次の日も、また雨だった。

約束どおり豊岡名主はやってきた。蓑の後ろから長い太刀の先がのぞいている。たまさまが取りつぎ、お代官さまは政所の広縁に出られた。豊岡名主は雨に濡れながら、大きな声を張りあげた。

「それがしは豊岡と申す。おりいって願いがあつて、まいった」

豊岡名主は頭をさげた。

「それがしの田んぼの半分が川流れになりもうした。かさねて、この長雨で水をかぶつたままでごさる。今年も稲が実りませぬ。年貢米を納めることができませぬ」

お代官さまは豊岡名主をにらみつけた。

「年貢を納めねば、よいか、成敗いたすぞ」

「それがしはまつとうなお願いをしておるのでござる」

「年貢を納めねば、おまえの首が飛ぶぞ」

「首が飛んでも、納めるつもりはござらぬ」

「言わせておけば、いい気になりおつて。許さん！」

豊岡名主の目がぎろりと光った。

「許さぬ、とおおせられましたな。どのような成敗をなさるか、とくと拝見つかまつろう。では、ごめん」

豊岡名主は蓑の肩をゆすりあげ、雨の中を帰つていった。

お代官さまは、それからというもの、とても不機嫌になられた。

雨はしばらく降り続いた。

言葉どおり豊岡名主は年貢米を一粒も納めなかつた。

やがて季節は早い冬を迎え、霜が田んぼやあぜ道を白く縁取った。

政所の木小屋で寝泊まりするユカリとアキラには寒さはこたえたが、二人ともよく働いた。一日が前の一日と同じように過ぎていった。

季節は確実に移ろい、雪が降り始めた。雪は政所の広縁をおおうほどたくさん積もった。

里のあちこちでは、食べるものがなくなつて、特に貧しい百姓が、一人、二人と、死んでいった。雪の中、貧しい葬式が出された。ムシロでくるんだ死人を二人が肩にかつぎ、身寄りのだれかが竹の先に白い布を結んだ旗を持って、葬式の行列はゆらゆらと村の境へ登つていった。雪をどかし土を掘つて、死人を埋めた。

今夜も雪の重みで庭木の枝が折れる音を聞きながら、ユカリは、この新見庄にタイム・スリッパした日のことを思い出していた。新見のおばあちゃんの四十九日法要があつた日に『うらない婆』によってユカリとアキラは新見庄へ飛ばされたのだが、あの日から数えてどのくらい過ぎたか？ 今は二度目の冬だから、もう二年間も新見庄に閉じこめられている。でも、二年間ここにいたとは思えない。伸び盛りのアキラの身長が全然伸びておらず、わたしもまったく成長していないように感じる。まるで夢を見ているようだ。夢の中で二年過ぎた、と錯覚して

いるのかもしれない。目が覚めたら夢だった、とわかる。そんな感じだ。だとしたら、この夢が覚めるのはいつ？ 覚めた時は、いつの時代で、そこはどこ？

一つだけ確かなのは、元の世界にもどる方法がわからないこと。

おばあちゃんの家がある新見にもどりたい。京都の自宅じゃなくて、新見のおばあちゃん家でお母さんがわたしたちを待っているだろう。

行方不明になつたわたしたちを、あれから、ずっと待っている。なぜかわからないけど、そんな気がする。お父さんは死んでしまったから、新見の家に帰つても、会えないのはわかつているけど、お父さんにも会いたくない。

ユカリは今さらのように、もつとお父さんといろいろ話をしておけばよかった、と思う。中学校進学についてお父さんは「中高一貫の私立がいい。お金の心配はいらない。受験にトライしてみたら」という意見だったが、お母さんは「府立で十分」と譲らなかつた。ユカリはどちらとも決めかねていた。

そんなことを思い出すと、悲しくなる。もし元の時代にもどれたら、今度こそお母さんと徹底的に話し合おう。やっぱり、お母さんしか頼る人はいないんだから……。

ユカリはいつの間にか眠っていたらしい。ドサツという軒から雪が落ちる音でユカリは目覚めた。となりにアキラが寝ていた。スースーと軽い寝息を立てている。おいしいものを食べる夢でも見ていたのか、目をつむったまま笑った。その笑顔は「おねえちゃん。大丈夫だよ」と言っているみたいだった。

年賀と年貢

年の瀬は思いのほか晴れ続きで、お代官さまにとって初めての年賀の儀は明るい青空の下で行われた。荘園全域から名主たちが政所の前庭に集まる、大きな行事だ。幾人かは荷車に荷を積み下男に引かせて来た。

ユカリはゆいばあさんにそつとたずねた。

「あの荷物はお祝いの品なの？」

「いいや。あれはなあ、ぜえーんぶお年貢じやよ」

「そうなの。新年早々、お年貢を運んでくるなんて、ご苦労だねえ」

「そうさな。名主たちにとってみれば、難儀なお務めよ」

「お年貢はお米じゃないように見えるけど」

「そうさな。米は穫れた際に納めるから、ほとんどの名主はもう納めている。これらは漆だったり、タタラで作った鉄だったり。この冬に梳いた紙を納める者もおるよ」

「へえ。すごいね。いろいろな品物がお年貢になるんだね」

アキラも興味を持ったようで、ゆいばあさんにたずねた。

「ねえ。このお年貢は全部お代官さまがもらうの？」

「いいや。お寺さまへ納めるものだよ」

「そうか。お代官さまって、あんまりもうからないんだな」

「は？　なんと言うた？」

「いや。いいよ」

アキラがゆいばあさんと年貢の話をするなんて意外だ、とユカリは思わず笑ってしまった。

「おねえちゃん。なにがおかしいの？」

「ううん。なんでもない」

名主たちが勢ぞろいしたところを見はからつて、いよいよお代官さまが政所の広縁に登場した。

広縁の下に従者の彦四郎(ひこしろう)どのと兵衛次郎(ひょうじろう)どのがひかえている。庭に並んだ最前列のお役人三人が進み出て年賀の祝いを申し上げた。それを受けてお代官さまが大きな声をあげた。

「大義である。今年もお寺さまに尊崇の念をささげ、年貢献納を怠るでない。しかと申し渡す」

名主たちがどよめいた。ユカリには名主たちの気持ちがあわかった。なにも年賀の儀に年貢の話を出さなくてもよいだろうに。お祝い気分がそがれてしまう。

アキラがそつと言った。

「年貢…年貢…お代官さまはほかに言うことが

ないのかなあ」

やっぱアキラだつてそう思うのだ。

お代官さまが声を張りあげた。

「ここに、年貢を二年間納めない者がいる」

場は一気に緊張した。

「豊岡名主。申し渡すことがある」

お代官さまの声は重く響いた。

「豊岡。前へ出る」

最後列に隠れるように立っていた豊岡名主が身をふるわせたように見えた。しかし、名主たちの間を分けて前へ出ることはなかった。お代官さまは、しばらく豊岡名主をにらみつけていたが、豊岡名主が一步も動かぬとわかって、言葉を継いだ。

「裁定を告げる。その前に、申し開きたいことがあれば、申せ。豊岡」

豊岡名主は顔を上げたが、すぐに目を伏せた。

「申すことはないのじゃな。では、裁定を言い渡す」

お代官さまは書状を広げ、書かれている文句を読みあげた。

「名主豊岡を、年貢を二年分怠納した咎により成敗する」

豊岡名主が顔を上げた。

「成敗とな？ どのような成敗でござるか？」

お代官さまの顔が真っ赤になった。

「斬首に処す」

豊岡名主の目がつりあがった。

「わしは、首を斬られるような罪を犯してはおらぬ」

「だまれ。年貢二年分を怠納したのじゃ。罰を受けるが当然」

「そりゃあ、年貢を納められなんだなあ、しかたがねえ。米が穫れなんだんじゃ。去年もその前の年も米が穫れなんだ」

「米の出来高にかかわらず年貢は納めねばならぬ。定めである」

「定めがどうじゃろうと、無いものは、無い。

今年、運が良うて、大雨が降らんで川流れにならんかったら、米が穫れる。そうすりゃあ、納めますがな」

豊岡名主は食いさがつた。その言い方がお代

官さまをもつと怒らせた。

「だまれ！ ただちに、首を刎ねてやる！」

豊岡名主が大声で言い返した。

「お代官。ええか。よう聞きなされ。わしらが米を作つて納めんかったら、お寺さまも、お代官も、食うてはゆけまい。そんな道理すらわきまえんのか」

お代官さまは怒りにふるえた。

「豊岡！ 許さん！」

と同時に、太刀をつかんで抜き放ち、広縁から庭に跳びおりた。その勢いで豊岡名主に迫ろうとしたとき、政所の広間から走り出たものがある。たまさまだ。たまさまは裸足のまま庭において、お代官さまの前に身を投げ出した。地面に両手をつき、顔を上げて、お代官さまを見た。

「お代官さま。お気を鎮めてくださいませ」

だれもが予期しなかった行動が、その場にした全員を、一瞬凍りつかせた。

「いつときのお腹立ちにまかせて太刀をお抜きになれば、取り返しのかかぬ恨みを買いまする」

お代官さまは太刀を振り上げたまま、たまさまと豊岡名主を交互ににらみつけていた。

たまさまは重ねて申し上げた。

「豊岡名主を成敗すれば豊岡名主一人の問題ではなくなります。新見庄全体を敵に回すこととなりましょう。そうなればお代官さまご自身のお立場も揺らぎましようぞ」

お代官さまの顔がゆがんだ。

「お代官さま。太刀をお収めになってください。一人の名主の成敗が結局はお寺さまへの信頼を損うことになります」

お代官さまはしばらくそのまま突っ立っておられた。

「お代官さま。たまの一生のお願い、どうぞお聞き届けくださいませ」

たまさまの懇願に負けて、お代官さまは太刀を鞘に収められた。そして広縁にもどって威儀を正し、先ほど広げた書状を破り捨てた。広縁の下で機をうかがっていたお役人がた三人がお代官さまに進言した。

「本日はお裁きを収めて、後日、裁定を言い渡

されてはいかがか」

「いや、それより、裁定を書き直されるがよろう」

「書状は必要ござらぬ。口頭で言い渡されてもよろしかろう」

お代官さまの表情が変わった。激しい憤りがすこしやわらいだよう、庭に並んだ名主たちを眺め直し、最後に豊岡名主をにらんだ。

「豊岡。心して聞け」

場はシーンと静まり返った。

「年貢を二年分怠納した咎により、豊岡の田畑を没収する。名主は所払ところばらいに処する。ただちに新見庄から出て行け」

皆の後方から豊岡名主の声が響いた。

「お代官。むしろ新見庄の百姓を甘く見るなよ。この恨み、きつと、晴らしてやろうぞ」

そう言い置いて、豊岡名主は政所の前庭から出ていった。

アキラがこっそりつぶやいた。

「たまさまって、すごい。お代官さまを心変わりさせるんだからなあ」

ユカリも同じように思った。たまさまは、お代官さまに豊岡名主の首斬りを思いとどまらせてただけでなく、名主たちみんなを善い方に導いた。きつと、お代官さまに恨みが集中しないように、必死で守ろうとしたんだらうな。たまさまは強い人だと思っていたけれど、心はやさしい。とつてもやさしい。

年賀の儀は終わった。名主たちはそれぞれ引き上げていった。

季節は飛び去り

季節は、正月の田の神祀り、春の田起こし、初夏の田植え、猛夏の田の草取り、初秋の虫送りと過ぎて、今まさに黄金の秋。幸いに長雨や早魃がなくて、どこの田んぼも豊作になりそうだ。百姓たちは稲の刈り入れをいつにするか、ころ合いを見はからっていた。

政所でも、お代官さまとお役人がたは年貢米の割り当てなどを話し合っていた。

「まことに凶作でなくて幸いでござる。お年貢がそこそこ集まると期待してよかろうぞ」

「いや。事は慎重に運ばねばなりませぬ。強く出れば名主たちは引いてしまい、逆効果でござる」

「さよう。豊岡名主の件で明らかのように、なるたけゆるやかな取り立てを心がけねばなりませぬ」

「わかった。わしも豊岡の処し方で、いささか学んだ。無理強いはいたさぬ」

「わしは、この晴天が続いておるうちに、莊園を巡つて来よう」

「稲の出来具合を直接ご覧になるのですな」

「くれぐれもお気をつけて」

「とくに地頭方はご用心なされ」

「わかった」

数日後、お代官さまは彦四郎どのと兵衛次郎どのを連れ、馬に乗って出立された。

たまさまはお見送りに出て、お代官さまたちの姿が見えなくなっても、前庭に立ちつくして

いた。建物の陰からのぞいていたユカリは、あれっ、と思った。たまさまのお腹がすこしせり出しているように見えた。元々ふくよかなお方だから気づきにくいのが、ユカリは「もしかするとお目出度めでたが近いのかしら」と思った。

たまさまはアキラを呼び寄せて命じた。

「お代官さまの後をつけて行きなさい。ちょっとでも変わったことが起こったら、ただちに報告にもどるのですよ」

アキラは身軽に政所を飛び出して行った。アキラはこれまで何回か、たまさまから同じような役目を言いつかって遠出したことがあるので、ユカリはこの時も心配しなかった。アキラなら大丈夫。新見庄に来て丸二年になる。その間に頼りになる若者に成長した、と思う。ただ、なぜか身長はさっぱり伸びなかったけれど……。

ところが、その日の夕方、新見庄をゆるがす大事件の報せが届いた。

日が傾きかけてもアキラがもどって来ない。ユカリはだんだん心配になってきた。たまさまに「アキラを探しに行ったほうがよいのでは」

と言ったが、たまさまは「どちらへ行ったかわからぬ。探しようがありません」と取り合ってくれなかった。

まさにそのとき、彦四郎どのが息も絶え絶えになりながら政所に走りこんできた。

「お代官さまが、や、やられました！」

彦四郎どこのさけぶ声に驚いて、たまさまが前庭に飛び出した。ユカリも出た。

「彦四郎。なんと申した？」

「お、お代官さまが、谷内で、斬り殺されました！」

たまさまの形相が変わった。

「まことか？」

「まことでござります」

「お屋形さまにお伝えしなければ！」

そのまま、たまさまは福本のお屋形へ走った。

彦四郎どのお屋形へ駆けこんだ。

ただちに福本のお屋形さまが動いた。近くの百姓たちを呼び集め、宮田どの、金子どのらお役人の屋形へ事件を知らせ、自らは先頭に立って、彦四郎どのが報告した事件の現場、地頭方

の谷内へ走った。数人が続いた。

たまさまは政所にもどると、ゆいばあさんとユカリに命じて、広間を整えさせた。たまさまはいつもと変わらず冷静だった。ユカリはそれを不思議に思った。

「たまさまだって、本当は動揺しておられるにちがいないのに……」

アキラは、それから間もなく、政所に帰ってきた。ものすごく興奮していた。たまさまとユカリに、見たことを全部話した。

お代官さまの最後

お代官さまは彦四郎どのと兵衛次郎どのを連れて街道を北へ向かった。地頭方の谷内という集落を通り過ぎようとしたときだった。家を建てていた百姓たちが街道に飛びだしてきて、お代官さまたちの前に立ちふさがった。

「普請場ふしんばを馬に乗ったまま横切るとは、なんたる無礼ぞ」

「馬をおりよ」

「おりぬなら、引きずりおろせ」

「やつつけろ」

お代官さまは馬から下りた。

「そのような決まりごとがあるとは知らなかった。許されよ」

しかし、百姓たちは許すどころか、それぞれ刀を抜いて、お代官さまたちを取り囲んだ。兵衛次郎どのは刀を抜いた。彦四郎どのも刀を構えた。百姓たちがじりじりと間合いを詰めてきた。斬り合いは避けられそうにない。

そのとき、二人が間に割って入った。名主らしい二人は百姓たちを「まあ、まあ」と、なだめた。

「刀を引きなされ。お代官どのは、普請場では下馬すべし、という、このあたりの習わしをご存じなかったのじゃ」

二人はお代官さまへ向き直って腰を低くした。「それがしは地頭方の名主、横見よこみと申す。無礼を許されよ」

「それがしは谷内でござる。この者たちを大目

に見てやってください」

お代官さまは兵衛次郎どのと彦四郎どのに「刀を収めよ」とお命じになった。兵衛次郎どのと彦四郎どのはお代官さまの命令に従った。

それを見て、百姓たちも刀を引いた。お代官さまは「では、通る」と、軽く頭をさげ、通り抜けようとした。

まさにそのとき、横見名主と谷内名主が、いきなり刀を抜いて、お代官さまに斬りかかった。百姓たちも再び刀を抜いた。兵衛次郎どのが真っ先に斬られて道に転がった。百姓の一人がお代官さまの腹を突き刺し、もう一人が背中を斬った。彦四郎どのは刀を構えたままあとずさりした。

「代官！ よくも豊岡名主を成敗してくれたな！」

「われら、豊岡名主にかわって、恨みを晴らす！」横見名主と谷内名主は豊岡名主の濃い親戚だった。前の年に豊岡名主を所払いにし田畑を取りあげたお代官さまを、その時からずっと恨んでおり、いつか仇をとってやろうと機会をねら

っていたが、お代官さまが谷内集落を通り抜けたようとした、その時をのがさず、殺害におよんだのだ。

「われらが恨み、思い知ったか！」

「天罰じゃ！」

横見名主と谷内名主がお代官さまの息の根を止めた。百姓たちは兵衛次郎どのをさんざんに斬り殺した。かろうじて、彦四郎どのは逃げ帰った。

アキラが話し終わると、たまさまは目を伏せ、深いため息をついた。けれども、涙は見せなかった。

ユカリも辛かった。だって、たまさまはお代官さまをとても慕っておられたんだから。一年間ずっと、お二人のようすを近くで見えてきて、知っている。

そして、たまさまの悲しみはユカリの悲しい思い出につながった。ユカリは心の中で語りかけた。

「お父さん。お父さんが突然交通事故に巻きこ

まれ病院へ運ばれたと知って、わたしがどんなに辛かったか、今でも思い出す。お母さんと病院に着いた時には、亡くなっていた。もうお父さんの声を聞くことはできない」

ユカリは時々思い出す。お父さんのよく響くバリトンの笑い声。メガネの奥の笑った目。人づきあいがよく、いささかオセツカイ。かと思うと、マジメでガンコ。ユカリの中学校進学についてアドバイスをしてくれたときは「超」シンケンだった。でも、進路のことではお母さんと思いが合わなかったけれど。ともかく、お父さんはとても家族思いだった。

「お父さんともっと話したかった」

しかし、思い出は思い出として大事に秘めておこう。今は、目の前の悲劇を乗り越えなくては……。

その日の暮れ方になって、お代官さまと兵衛次郎どのが政所に運ばれてきた。遺体は清められ、広間に横たえられた。そして、福本のお屋形さまら三人のお役人がお代官さまの枕元で夜

を明かした。

お代官さまの葬儀は、翌々日に善成寺で営まれた。

お役人たち、たまさま、有力な名主たちが本堂にすわった。ユカリとアキラは本堂の回廊のはしっこにかしこまった。お坊さん五人が、本尊の阿弥陀如来の前に着座した。長い長いお経が始まった。「南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏……」と、となえる声がいつまでも続いた。

儀式が終わると、遺体をお寺の裏山に埋葬した。お寺近くの百姓たちが墓穴を掘って待っていた。棺桶が穴に下ろされた。その上に土が盛りられ、小さな山になった。土饅頭の上に丸い石が置かれた。

たまさまは、お代官さまの死に直面しても、涙を流さなかった。たまさまがどれだけ悲しみに耐えているか、ユカリにはわかるような気がした。

そして、ユカリは思い出した。お父さんのお葬式するとき、お母さんがどれほど冷静に喪主としてふるまったか。お母さんは、だれかに悲し

みをぶつつけるんじゃない、涙を隠して、静かに弔問客に應對していた。突然「ヒクツ、ヒクツ」と大声で泣きだしたアキラを両手で抱きしめ、「だいじょうぶよ。だいじょうぶ」と言い聞かせた。ユカリが泣きながらお母さんに寄っていくと、アキラといっしょにユカリも抱きしめてくれた。三人ひとかたまりになり、しばらく、そのままだった。そのときのお母さんは、きつと自分に言い聞かせていたんだろう。「この子たちのために、わたしがしっかりしなくちゃ。今は泣かない。泣くのは後でいい」と。

今のたまさまは思っているにちがいない。「お腹にいる、もうすぐ生まれてくる赤児あかごのために、わたしは悲しみに耐えて、生きる」と。

ユカリは、今すぐ、お母さんに会いたい、と強く思った。そして、言いたかった。

「お母さん。わたし、わかったの。お母さんがどれほどわたしたちを大切に思ってくれているか」

同時に、お父さんにも言いたかった。

「お父さん。お父さんも、お母さんと同じくら

い、わたしたちを愛してくれたんだ」

ユカリの目からフワツと涙があふれた。

その後、お役人たちは、お寺さまへ大事件を報告するために、長い長い手紙を書いた。

お代官さまが斬り殺されたとき、事件現場の谷内集落へ駆けつけたのは、福本のお屋形さまほか数人の名主たちと近くの百姓たちだったが、代官を殺した犯人を見つけることはできなかった。おそらく犯人が逃げこんだのは上市かみいち、地内にある地頭方政所にちがいないと判断し、上市地内へ向けて走った。地頭方政所にはだれもいなかった。お代官さまが乗っていた馬は馬小屋につないであった。百姓たちはその馬を連れだし、政所の建物に火をつけた。燃えあがる炎と煙は夕暮れの空を赤く染めた。

それから十数日たっても代官殺しの犯人はわからずじまいだった。逆に、地頭方の役人が「わたしの政所を焼いた罪をつぐなえ」と建物の建て直しを要求してきた。地頭方の領主は京の相国寺しょうこくじで、相国寺には幕府という絶大な

後楯がある。新見庄の領主である東寺は、相国寺を相手にとても勝ち目はない、と諦めてしまいい、「地頭方の要求を呑むように」と言ってきた。新見庄のお役人がたはお寺さまの意向に従うしかなかった。どんなにくやしかったことだろう。おさまらないのは新見庄の百姓たちだ。「こつちは代官を殺されたんじゃぞ。それはおとがめなしで、建物を焼いたわしらにおとがめがある。そんな理不尽が通つてたまるか。承服できぬ」と、かたくなに建物の再建をこばみ続けた。臨時に代理の代官が新見庄にやつて来たが、代理人ではなにも解決できず、すぐに解任され、京へもどつてしまつた。

お役人がたは毎日、評定ひょうじょうばかりしていた。代官不在を知つて他国の武家が新見庄を荒しに来るかもしれない。それに備えなければならぬ。莊園の境に武器を持った百姓を交代で見張りに立たせた。もし、莊境を守りきれなければ、百姓たち全員を呼び集めて応戦する。そこまで段取りを固めた。

「善成寺の大鐘が鳴つたら、ただちに、刀、槍

を持つて八幡宮に駆けつけよ」
各名主たちへ伝令が走り、新見庄はかつてない緊張に包まれた。

たまさまの手紙

お役人たちが評定を重ねている一方で、たまさまは独自の判断でお寺さまへ手紙を書いて出した。

その詳細をユカリが知つたのは二か月後だったが、たまさまの身近にいたユカリは、早い段階で、たまさまが重い決断をした、と察していた。その決断とは、たまさまのお腹にいる赤児のことではないだろうか。

ユカリが推測したとおり、たまさまは必死の願いをこめた手紙を書き、京へ帰つて行く彦二郎どのに託した。

手紙は女文字、つまり平仮名で書かれていた。

このようなことを もうしあげましては

おそれいりませんが

はじめをもしのんで 一筆もうしあげます

慎み深い文言で始まった手紙は一気に核心に入ってゆく。

わたくしは この ひととせのあいだ

あさゆう まんどころに つとめて

おそばにおりましたので

ゆうせいさまに なじんでおりました

そのかたが おなくなりになりました

これからは そのかたの ぼだいを

とむらうのが わたくしの つとめ

と ころえます

ゆうせいさまの かたみを

すこしばかり わけていただけますれば

これに すぎたる しあわせは

ございませぬ

どうぞ ごじひを たまわりますように

形見の品として三つ書いてある。

しろこそで つむぎのおもて

ぬのこ この三品を ぜひとも

いただきとうございます

ゆうせいさまの いひんは

みんなも しておりますので

すべて しょぶん いたしました

けれど この 三品だけは

わたくしに たまわりますなら

どんなに うれしいことでしょう

ユカリは知っていた。白小袖、袖の表、布子。

三品ともお代官さまが着ておられた衣服だ。そ

して、三品とも今はたまさまの手元にある。た

とえ、お寺さまから「代官の遺品はすべて東寺

へ送り届けるように」と命じられたとしても、

命令に逆らって、三品を送らなければよいのだ。

たまさまの決心は揺るがなかった。

さらに、これも二か月後にわかったが、たま

さまは、三つの衣服を、やや小さめの寸法に縫

い直していた。お代官さまの形見が「生まれてくる子に受け継がれますように」との願いをこめて。ユカリは、たまさまの必死の願いを察して、胸が熱くなつた。

ついに敵が攻めて来た

代官殺害事件から二か月がたった。

新見庄にまたまた大事件が起こつた。

「敵方が攻めて来たぞ！」

「今度は多治部（たじこ）方じゃ！」

「もう、そこまで、やってきとる！」

「迎え撃て！」

百姓たちのさけび声が里村を駆け抜けた。川向こうの善成寺の大鐘がゴォーン、ゴォーンと撞き鳴らされた。

その時、ユカリとアキラは政所にいた。驚いて前庭に飛び出すと、胴丸鎧を着て槍をかかえた百姓たちが走っていくのが見えた。

「みんな、八幡宮へ集まるのじゃ！」

「急げ！ 急げ！」

政所に残つたのは守備をまかされた少人数の百姓だけだ。

これまで百姓たちは何度も八幡宮の境内で水を酌み交わし「京のお寺さま以外に領主を戴かず！」と誓って、敵を追い返してきた。ところが、今度ばかりは不意を突かれた。攻めて来たのは多治部方で、東側から領内に侵入した。三年前に武家の安富（やすとみ）氏は南から越境しようとしたので、このたびも南側の守りは万全にしていたが、東側の莊境は警備が手薄だった。お役人がたが油断していた、と言つてもよい。ともかく、多治部方は新たな強敵だった。

ユカリとアキラは見た。

十騎ほどの騎馬武者が、大川をはさんだ向かいの山裾から大川の岸に駆けくんだり、川幅の狭くなつているところを難なく渡つた。騎馬武者の後ろに徒歩組（かちみ）が続く。徒歩組も難なく大川を渡って攻めあがって来た。二手に分かれ、一手は政所へ突進し、一手は八幡宮を取り囲む。八幡宮に集結した新見庄方は多くても三十人。

敵方は倍以上。

さあ、大変だ。逃げなくちゃ。アキラがユカリの腕をグイッと引つ張った。

「おねえちゃん。ぐずぐずしないで！」

「わかった。どっちへ逃げる？」

「お屋形へ！」

二人は、田んぼ二段上の福本のお屋形へ、一息に走った。お屋形には、奥方さま、たまさま、ゆいばあさん、あや、下男、下女がいる。早く皆を逃がさなければならぬ。こんな火急なとき、アキラは本当に頼りになる。お屋形に飛びこむと、大声で指示を出した。

「今、敵は政所を攻めている。その間に、裏山へ逃げよう！」

たまさまは、大きなお腹なので、皆のようには走れない。でも、懸命に足を運んだ。ユカリはたまさまにピツタリ付き添って走った。後ろから奥方さまが励ましてくれた。

裏山の中腹にある小さなお堂にたどり着いて、皆がホッと足を止めたとき、下の方から喚声が聞こえてきた。

「政所を奪ったぞ！」

「われらが勝ちじゃ！」

「家を焼き払え！」

「政所だけは残せ！」

振り返ると、政所の前庭に新見庄方の百姓数人が倒れているのが見え、福本のお屋形から煙が上がっていた。敵方が燃やしたのだ。煙はまたたく間に炎となって屋根を焦がした。

「なんということを！」

奥方さまが嘆きの声をあげた。皆も泣きだした。たまさまだけが涙を見せなかった。

その夜は裏山の小さなお堂で明かした。

翌朝早く、下のようすをうかがうと、敵方は政所を中心に陣を張っていた。向かいの山麓の八幡宮に立て籠もっているはずの新見庄方はどうなったかわからない。莊園各地から援軍がやって来たようすもない。完全に敵方に包囲されたままのようだ。

午後になると、なぜか、多治部方は包圍陣を解いて、新見庄から出て行った。ひそかに偵察に出ていたアキラが帰ってきて報告した。アキ

ラは、こういう場合、実にすばしっこい。

奥方さまが皆に言った。

「ともかくお屋形に帰ってみましょう。全焼はまぬかれたのではないか」

山道をくだっていくと、あちこちに戦の痕が残っている。多くの家のワラ屋根や板壁が焼け焦げていた。ただ、百姓たちは逃げて、殺された人はいないようだ。政所はまったく燃えていなかった。

福本のお屋形は、別棟が焼け落ちているけれど、主屋が無傷だった。

産声をあげなかった赤児

奥方さま、たまさま、ゆいばあさん、あや、下男、下女、ユカリとアキラはお屋形の主屋に入った。すぐにお粥を炊いて、空腹を満たした。

アキラが「フウー、おいしかったあ」と声を上げたので、みんなもつられて、ちよっと笑顔になった。ほんの一時だったが、みんなに安ら

ぎの気持ちもどった。

すこしして、たまさまが奥方さまに「お願いがあります」と、両手を突いて頭を下げた。奥方さまは「よほど大事な話のようじゃな。みんなは遠慮してくれぬか」とおっしゃった。みんなはそろって部屋から出た。ユカリは、どうしても気になるので、そっと引き返して、板戸の間から、奥方さまとたまさまが話す声に耳を澄ませた。

「わたしがお産で命を失うようなことがあれば……」

たまさまが言いかけると、すぐに奥方さまがさえぎった。

「そなたは、死にはせぬ。わたしがお産に付き添います。気持ちを強く持ちなされ」

「ありがたいお言葉。でも、万が一、そうなったら、申し上げておかなかつたことを悔やむでしょう。ぜひ、聞いてくださりませ」

「わかりました。うけたまわりましょう」

「このツヅラに手紙と衣類が入っております。生まれてくる子に渡そうと思って用意したものを

です。それを、わたしにかわって、渡してやってはくださいませぬか」

「手紙と衣類じゃな」

「手紙はわたしの遺言として書きました。衣類は、亡くなられたお代官さまの、大切な形見です」

「お代官さまの形見か。そなたがもらい受けた品々であつたな」

「はい。白い小袖と紬の表、それに布子の三品です」

「必ず、渡す。安心なさい」

「かたじけのうございます」

「そうじゃ。よきことを思いついた。もしも、もしもじゃよ、万が一の場合は、その児をわれらの養子としましょう。福本の家の子として、わたしが育てます。お屋形さまも否とおっしゃるまい」

「ありがたいお話。もうこれで、心残りはありませんませぬ」

ユカリが耳にしたのは二人の会話の全部ではなかったが、それでも、たまさまの強い覚悟と

奥方さまの義妹を思うやさしさが伝わってきた。

奥方さまが「話はすみました。お入りなさい」と言つて、みんなを部屋に呼びもどした。

こうして、全員がほっと一息ついたのも束の間、たまさまが急に苦しみ始めた。お産が近づいたのだ。

すぐ、奥方さまは、焼け残った別棟を産屋に模様替えし、たまさまを移した。ゆいばあさんが付き添った。

ユカリはとても不安だった。無事にお産が終わったとしても、気を許すことはできない。だつて、戦は今も続いているのだから。いつ敵がこの屋形に攻めてくるかわからない。たまさまを産屋に残したまま、走れる者だけが逃げるなんて、ありえない。ユカリの心配はふくらむばかりだった。

なお悪いことに、たまさまのお産はとても難産のようだ。夕暮れになつても赤児の産声は聞こえなかった。

ユカリは産屋のようすを見に行つた。静かだった。入り口の戸に耳を寄せてみたが、やつぱ

り、人の動く気配が感じられない。ユカリは主屋に引き返そうとした。

と、そのとき、入り口の戸が開いて、奥方さまが姿を現した。白い布にくるんだものを胸に抱いている。奥方さまはだまつたまま主屋の方へ歩いて行った。産屋の中からは、ゆいばあさんの低い声が聞こえてきた。言葉にならない泣き声だった。

ユカリが後に知った、たまさまの最期は痛ましかったという。

たまさまは難産の末に赤児を産んだ。女の子だった。生まれた赤児は産声を上げなかった。たまさまは疲れ果てていた。奥方さまが「女の子じゃ。かわいい顔を見てやりなさい」と言っても、動けなかった。奥方さまは赤児を抱いたまま、たまさまの口元に耳を寄せた。かすかな息が漏れた。

「この子に渡してやってください。形見の三品を……。手紙も……」

奥方さまはうなずいた。

「安心しなさい。わたしが必ず渡します」

「ありがとうございます」

「せめて、この子に触れておやり」

「はい」

たまさまは右手を伸ばし赤児の顔に触れようとして、触れることができず、そのまま息絶えた。

たまさまの死に顔は安らかだった。みんなでお屋形の広間にたまさまの遺体を移し、生まれつきの赤児はその側にそっと寝かせた。

みんなはそのまま夜を明かした。

ユカリは、長く辛い、眠れない夜をじっと耐えながら、思いを巡らせた。

なぜ人は死ぬんだろう？ だれでも、いつかは、死ぬ。それが、いつかは、だれもわからない。でも、どうしてお父さんは、あんなに突然に死ななければいけなかったの？ おばあちゃんは今も年寄りだから死んでもいいの？ ユカリは今も、たまさまの死に直面し、なおのこと、なぜ人は死ぬのか？——と自分に問う。そして、亡くなった人と生きているわたしとの間ほどのくらい遠いのか？——と考える。人が亡くなっ

たらその人に二度と会えない。だから、永遠の遠さかな——と思う。でも、その人を思い出すと、その人がすぐ近くにいるように感じる。笑顔が見える。笑い声が聞こえる。すこしも遠くない。思い出があれば、その人はわたしの心の中で生きている。お父さんは突然の事故で死んだけれど、遠くへ消えてしまったんじゃない。お父さんはわたしをすぐ近くで見守ってくれている。おばあちゃんは亡くなったけど、思い出はいっぱいある。おばあちゃんが作ってくれた秋祭りのサバ寿司と巻き寿司のおいしさは忘れられない。おばあちゃんはわたしの思い出の中で生きている。

そして、たまさまの思い出も決して消えない。思い出があるかぎり、たまさまは、わたしの心の中で、生き続けるだろう……生き続ける……。ユカリは、いつしか、眠りに落ちたようだ。気がつくと、朝になっていた。

またしても戦

翌朝、またしても戦が始まった。武者の数を倍に増やして攻めて来た多治部方が新見庄の中心部を完全に制圧した。政所はもちろん、まわりの名主屋形をことごとく占領した。福本のお屋形にも多治部方が押し入って来たが、なぜか、多治部方の武将と一緒に入ってきたのは福本のお屋形さまだった。お屋形さまは言った。

「福本の屋形は多治部方に明け渡す。持ち運べるものは持って出よ」

奥方さまは毅然として、お屋形さまと多治部方の武将に申し上げた。

「たまの通夜が明けたばかりです。弔いを済ますまでお待ちください」

お屋形さまは「たまの通夜」と聞いて驚いた。「そうであったか。じゃが、屋形を明け渡すのは延ばせない。弔いは墓地で営もう。わしがたまの亡骸を背負うてゆく。そなたらは持てるものを運べ」

敵方の武将は思いのほか寛大だった。

「福本どの。多少の猶予は許そう」

「堀田どの。かたじけない」

「なに、むしろ、親戚の間柄じゃ。そなたが仲に立ってくれたおかげで戦の決着が早くついた。その恩義もある」

お屋形さまは奥方さまに言った。

「ともかくも、ここは出ねばならぬ。当座は医王寺（いおうじ）を頼ろう」

奥方さまは静かに答えた。

「それがよろしゅうございます」

そう言ってから、奥方さまは赤児をお屋形さまに見せた。

「たまが産んだ子です。わたしたちの養女といたしたく存じます」

「このような戦の最中じゃが、できるだけのことはせねばなるまい」

「ありがとうございます」

それから、ゆいばあさんを急がせて手荷物をまとめさせた。ユカリは自分から言い出して、たまさまの遺品が収められたツヅラを受け持った。この中にたまさまの魂が宿っている。

「大切に、大切に、わたしが持つて行きます」

ユカリはツヅラをしつかり胸に抱いた。

四半刻の後、皆は裏山の墓地まで登り、先祖代々の墓が並んでいるところにたまさまを埋葬した。福本一族の菩提寺である医王寺のお坊さんが来てお経をとなえてくれた。

形ばかりの弔いが終わると、お屋形さまが言った。

「ご住職。これらの者をよろしくお頼み申す」

お坊さんが応じた。

「お寺には他の方々も逃げて来ておられる。遠慮のう、おいでなされ」

それを聞くと、お屋形さまは、急いで政所へ取って返された。

奥方さまはお坊さんに深くお辞儀をした。

「恩に着ます」

それから、皆を振り向いて、言った。

「さ、元氣を出すのじゃ。ほどなく戦は終わる。屋形にもどる日が必ず来る。それまで辛抱するのじゃ」

奥方さまは赤児を抱いて先頭に立たれた。ゆ

いばあさんが続いた。あやも元気に立ち上がった。

ユカリは思った。

わたしは、ここ、五百年むかしの新見庄で、見聞きしたもの、知ったこと、感じた悲しみや歓び、すべてを忘れない。

ふたたび『うらない婆』

ユカリたちは医王寺をめざして峠道を登っていった。

そのとき、にわかには、世界が一変した。たくさんの生きものが、空の上で群れをなして、鳴きながら、ぐるぐる飛びまわり、空が曇って、雪が舞いおりてきた。暗くなる。奥方さまたちの姿がフワッとゆがんで見えなくなつた。

ユカリとアキラと二人だけになっていた。ユカリが両手で大事にかかえていたツヅラが軟らかい雪のように崩れて落ちた。

「たまさまの魂が消えた……」

突然、アキラがさげんだ。

「おねえちゃん。あっち、見て！」

峠道を登った先に小さなお堂が見えた。ユカリとアキラが新見庄に飛ばされて来たときに『うらない婆』がいたお堂が、目の前にあった。

「お堂だ！」

「うん。行ってみよう」

お堂は傾きかけた夕陽を浴びていて、そこだけが明るかった。

ユカリはお堂の戸に手を掛けた。中で焚き火のはじける音がした。二人は戸を開けて中に入った。

焚き火の向こうにすわっていたのは『うらない婆』だった。

いきなり、アキラが大きな声で言った。

「おばあさん！ ぼくたちを新見の家へ帰して！」
ユカリもお願ひした。

「おばあさんなら、できるでしょ。あのとき、わたしたちを五百年むかしへ飛ばしたように、今度は、五百年未来へ飛ばしてちょうだい」

焚き火の向こうにすわっている『うらない婆』

の姿がゆらゆら揺れた。今にも消えそうだ。

「おばあさん！ おばあさん！ 消えないで！

おばあさんのほかに頼る人がいないの」

「おかあさんに会いたいんだよ！ おかあさんに会いたい！」

揺れていた『うらない婆』が揺れなくなった。

「おまえたちの思いが強ければ、かなうよ」

「わたしたちが強く思えば、願いがかなうのね？」

「そうさな。おまえたちの思いがどれほど強い

か、わたしにはわからんが、もし願いがかなった

ら、おまえたちの思いが強かった、ということじゃよ」

「おばあさんが、ぼくたちのおかあさんに会わ

せてくれるんじゃないの？」

「わしは、なあんも、できんよ」

「そんなことない。おばあさんがぼくたちを新見庄へ飛ばしたんだろ？」

『うらない婆』が笑った。

「ふっふっふっ」

焚き火がゆらゆら揺れた。

「おばあさん！ 消えないですよ！」

焚き火がボワツと燃え上がった。そして、『う

らない婆』がゆらゆら揺れたと思ったら、『うら

ない婆』の姿が消えて、そこには、たまさまが、いた。

「たまさま？」

ユカリは信じられなかった。

「……死んだ、たまさまが、どうして、ここに？」

たまさまは静かに答えた。

「わたしは生きています」

「でも、でも、わたしたちは、たまさまのお甲

いをしたんですよ」

「わたしは、ずっと生きています。五百年前も、

五百年後も……」

たまさまは静かに微笑んだ。そして、その姿はゆらゆら揺れて、元の『うらない婆』に変わった。

山がゴウゴウと鳴りだした。風が雪を運んできたのだろうか。風が戸を揺らした。

けれど、お堂の中はとても静かだった。

ユカリはこの静けさが不思議だった。ここに、こうして、じっとしていると、これまで味わった、悲しみや胸の痛みがスーッとなくなっていくようで、色々な事件が次から次へ起こった二年三か月の年月が、遠い、遠い、過ぎ去った日々のように思われてくる。

新見庄の戦は、本当に、あったのだろうか？ たまさまは女の子を産んだのだろうか？ たまさまは死んだのだろうか？ それから……？ それから……？

ユカリは『うらない婆』にたずねた。

「あなたは、だれですか？」

「わしは『うらない婆』じゃよ。じゃがな、五百年むかしにはちがう名じゃった」

「五百年むかしは別の名前だった？」

「『たま』と呼ばれていた」

「え？ 『たまさま』だった？」

「五百年生きておれば、その時その時でちがう名を持っていても不思議はなからう。今は『しおり』という名じゃよ」

「ええっ？ お母さんと同じ名前？」

「その次は『ゆかり』という名になるじゃろう」
「ユカリ？ わたしと同じ名前になるの？」

ユカリは、なにがなんだか、わからなくなつた。

お堂の中は静かだった。焚き火がパチパチとはじた。風が戸をガタガタ揺らした。

突然、焚き火がゴオツと燃えあがった。

お堂がグラグラ揺れた。

焚き火の炎がお堂いっぱいに広がった。

そして『うらない婆』が燃える火の中に消えた。

ここ、どこだか、わかるよ

「アキラ！ 脱出しよう！」

ユカリはアキラの手をにぎってお堂の外へ飛び出した。

外は深い雪におおわれていた。五百年むかしに飛んだとき、お堂は雪に埋もれていた。あのときと同じだ。

ユカリとアキラは雪の山道をくだった。

墓地への登り坂までくだってくると、急に明るくなった。夕暮から真昼に逆もどりしたようだった。

「おねえちゃん！ ここ、どこだか、わかるよ！」
アキラがさげんだ。

「ぼくたち、もどったんだよ！」

ユカリもはずんだ声で返した。

「五百年未来へもどったんだ」

再びアキラが大きな声を出した。

「アッ！ 家が見える！」

「ほんと。おばあちゃん家だ」

いきなり駆け出したアキラを追って、ユカリも走った。

「もう夢の中じゃない。お母さんに会える」

ユカリは気づいた。前を走るアキラの服が現代にもどっている。自分の服も四十九日法要の時の制服にもどっている。

坂道の先に墓地が見えた。黒い服を着た人たちが見えた。

「アッ！ お母さんがいる！」

アキラがさげんで、猛ダツシユした。

「五百年むかしから五百年未来へ、もどったんだ！」

ユカリはタイム・スリップが完全に終わったことを確信した。

墓地での納骨が終わり、みんながおばあちゃん家にもどったとき、お母さんがユカリとアキラに言った。

「あなたたちが急にいなくなったので、どこへ行ったのか、心配したのよ」

ユカリは、どう説明したらいいか、わからなかった。アキラが先に答えた。

「あのね、あのね、ぼくたちね、タイム・スリップしたんだ」

「ええ？」

「五百年むかしへ飛んだんだよ」

「うーん。よくわからないわ」

その晩、ユカリとアキラはお母さんに、新見庄へ飛んで体験したことを話した。

でも、お母さんがその話を信じたかどうかは、わからない。

二日後にユカリたちは京都の自宅に帰ってきた。

家に入ると、お母さんはお父さんに、新見で行ったおばあちゃんの四十九日法要のことを報告した。お父さんに報告——といっても、小さな仏壇に新見の銘菓をお供えして拜んだけだが、お母さんにしてみれば「無事に喪主の務めを果たしました」と言ったら、気がゆるんだんだろうな。フツと笑顔になった。

ユカリも、お母さんと並んで、お父さんの写真に「信じられない体験をしたよ」と報告した。アキラは得意気に「すっげえ冒険だったんだ」と言った。

その夜、ユカリはベッドに入ってから眠るまでの間、新見での体験を逆のぼってみた。次々と鮮明なシーンがよみがえる。まるで動画の再生みたいだ。それが全部夢だったなんて信じられない。

ただ、記憶ははっきりしていても、なぜそうなったかわからないシーンもいくつかある。

一番の謎は『うらない婆』の正体。だれだっ

たんだろう？ 五百年も生きてるんだから、生身の人間じゃない。幽霊となつてこの世にとどまっているのか？

その時、「魂」という単語がひらめいた。じゃ、だれの「魂」？ たまさまの「魂」かしら？ だとしたら、たまさまの「魂」は、わたしたちなにを訴えようとしたのだろうか？ 五百年むかしに新見庄で起こった事件を忘れないでほしい。いや、それだけじゃない。もっと大切なことをわたしたちに伝えようとしたのだ。もっと大切な、なにかを。でも、なにを？

ユカリは、いつしか眠ってしまった。すこやかな寝息を立てているユカリの唇がちよっただけ動いた。うれしい夢を見て笑っているようだった。

——おわり——

佳作

チャリオット

吉田 徹

ここは涼しい。同じ夏の季節を送っていると
は思えない。

いつも生活している都内と比べ、平均気温で
十度ぐらい低いのではないか。

旅行代理店の人に言われ薄手のカーデガンを
持参したことが良かった。

芽衣は生まれて初めて一人で旅行をしている。
旅行というと、一般的に、精神的な安定をもた
らすというが、半信半疑の印象を持っていた。

今までの経験からすると、旅行といえは、修学
旅行と新婚旅行しか頭に浮かばなかった。

「仕事でお疲れの気分転換にはうってつけのホ
テルですよ。信州信濃は涼しくて食べ物もおい
しいですからね」

芽衣の顔に「仕事疲れ」とでも書かれている
かのように、旅行代理店の男性店員はさりげな
くパンフレットを出した。

新婚旅行、卒業旅行、傷心旅行など、その人
の目的に合わせて旅行の行き場所もたくさんあ
る。店員は、この客が旅に何を求めているのか
を聞かなくとも、その表情や話しぶり、行き
先を瞬時に判断する能力があるようだ。

男性店員は、芽衣の旅行は、遊びや喜びを求
めているのではなく、傷心旅行に近いのだろう
と判断し信州信濃のパンフレットを出した。他
にも北海道や東北地方のそれも出した。精神的
に困窮し、生活に疲れた時、何故、人は北国に
その癒しを求めるのだろうか、芽衣はふと思
った。

確かに、今の芽衣には、沖縄や九州など、太
陽の日差しが降り注ぐ海や赤く熟した南国特有
の果物などのイメージは湧かなかった。

芽衣は旅行代理店の男性店員から勧められ
るまま、すぐに三泊四日の予定で「信州信濃旅
行」を契約し、料金を前払いした。

芽衣は看護師になり、都内でも有数の救急病
院に就職し七年が経過していた。

就職したばかりの頃は、先輩の仕事について行くのが精いっぱい、今思えば、右往左往ばかりしていた。

その上、勤務時間が、日勤、準夜、深夜と三交代制になっており、体が慣れるのに時間がなかった。

先輩の看護師が、若い時はいいけど、すぐに、きつくなり、生理も不順になって来るからと言われた。その予言通り、芽衣は働きだして三年目に不眠や頭痛、生理不順といった体の不調を感じ始めた。

ある時、点滴を本来するべき患者とは別の患者にしようとした事があった。

幸い、点滴をしようとした間際、他の看護師が間違いに気づいてくれ、大惨事になりはしなかったが、その時の感覚は今でもはっきりと覚えていて、夢の中でその時の光景がでてくると手が震える。

点滴の中の薬剤は抗がん剤だった。

翌日から、患者に点滴をしようとする、芽衣は疑心暗鬼になった。この点滴の薬は、本当

に間違いはないのかと。何度も確認する。何度確認しても、完全に不信感を払拭することができない。まるで自分を否定する自分が、もう一人自分の中にいるようだった。

自分の手を何度も洗う潔癖症の患者さんがいる。自分の手には、いくら洗ってもばい菌が付着しているのではないか。ばい菌はあまりに小さいため、人の目で確認することはできない。そのことがさらに不安を煽り、何度も手を洗ってしまい、手荒れがひどくなってしまう。

自分の行動に自信が持てず、常に不安が付きまとう心理状態に芽衣は陥っていた。

そのような精神状態が極限に達すると、背中や手の平に汗が浮かび、翼状針を持つ手は小刻みに震えた。新人の頃、患者さんに初めて点滴をする時の様で、まるで緊張しきった糸がプツンと音を立てて切れそうな状態だった。

それを見かねた病棟師長が、しばらく休むように指示してくれた。

注射の手技がへたなら経験を積むしかないが、芽衣のように精神的に手が震えるようでは看護

師として通常の仕事は困難だと上司は判断した。師長は、自分にも同じような経験があり、きつとよくなるからと話してくれたが、芽衣は全く自信がなかった。

仕事の他にプライベートでも芽衣は問題を抱えていた。

誰からも祝福され五年前に結婚した。

夫の健一郎は大学の先輩で、同じサークルだったこともあり、学生時代から付き合い合っていたが、お互いに社会人になり結婚したのだった。

健一郎はレトルト食品を販売する会社に勤務していた。

健一郎も芽衣の仕事に理解を示し、夜勤には送り迎えもしてくれた。

二人の関係が微妙にギクシャクしてきたのは結婚三年目頃だった。周りから子供はまだなのかという声が聞こえてきた時に比例していた。

不妊外来に行くことを嫌がっていた健一郎も周囲の圧力に屈したようにしぶしぶと不妊外来を訪れた。いろいろな検査をしたが結局、二人

とも特に異常はなかった。

とりあえず、ホルモン療法を試みたが効果がなく、人工受精までしたが、懐妊には至らなかつた。

不妊治療は保険が適応にならない部分もあり高額になった。今までの貯えを崩してゆかなければならなかつた。それでも二人の希望が叶えられることはなかつた。

芽衣と健一郎との口喧嘩の最後は、芽衣の不規則な看護師としての仕事時間についてだった。「妊娠し子供が授かるまで仕事を休んでくれなにか？」と健一郎は言い、その気のない芽衣と意見の対立が起こり、お互いに言いあつた後、無口になり、夫婦喧嘩は終わるといふ経過だった。

最近では、その夫婦喧嘩さえもしなくなつてしまつた。言い争つたところで結果は同じなので、芽衣も健一郎も言い争うこと自体に疲れてしまつていた。

しかし、芽衣はどんなにきつなくても今の仕事を止めたくなかつた。今、離職すると復帰する

時に躊躇することが心配だった。それぐらい医療や看護は日進月歩だった。それについて行くには一時的にも止める訳にはいかない。

芽衣は健一郎に、「どんなに言われても首を縦に振ることはなかった。

結婚五年目にして二人は別居を始めた。

衝動的に選んだ「信州信濃」だったが、来てみて正解だったと思った。

夏は涼しく、静かだ。都会と同じように人が歩き、車を通るが、何故かすべてがゆっくりとした感じがする。

人が話す言葉も方言のせいで聞き取りにくいのが心地良かった。

パンフレットで紹介された通り、静かでこじんまりとしたホテルだった。近郊に旧所名跡があったが、そこを無理に訪れなくてもよく、滞在中は自由時間としてもよかったことも気に入ったことの一つだった。

次の日、バイキング形式の朝食を一人でとっていた。

隣のテーブルに賑やかな団体がやってきた。団体は十人ぐらいの、六十前後のグループのようで、一つの人生の山をそれぞれが超えて来たような人たちで、ハイキングにでも行くのだろうか、一様にジーンパンにウインドブレーカー姿といった軽装をしていた。

帽子は庇の短いキャップを被り、ベレー帽の男性もいた。帽子や服の色調は全体的に暗めだった。

そして皆、双眼鏡を持っていた。じつとそれを見つめていると、一人の女性が芽衣の視線に気づいたらしく、微笑みながら、「これはね、バードウォッチングをするための双眼鏡なのよ」と説明してくれた。

朝食後、近くの湖の周りを散策に行くという。「そういえば、昨日の特急電車の中でも一緒にしたよね」ともう一人の女性が口を挟んできた。「よろしかったら一緒に行きませんか？」とバードウォッチングを兼ねた散策に誘われた。

野生の鳥を観察することの何が面白いのだろうか、と芽衣は思い、返答に躊躇していた。

黙っていたが、双眼鏡はリーダーの先生が持つているから大丈夫よ、と半ば強引に勧められ、芽衣は誘われるままに一緒に行くことになった。一時間後にホテルの前に集合することになった。皆のようにグッツまで持つてはいなかったが、踵の低い靴をもう一足持つてきていた。

ホテルの周りは針葉樹林が取り囲んでいた。

その中を縫うように細い林道があった。

一行は、蟻の行列の様に先生と呼ばれているリーダーの男性を先頭に進んだ。

時折、鳥の鳴き声があると、リーダーが的確に鳥の止まっている木の枝を指差すと、それぞれが首に掛けている双眼鏡を同じ方向に向けた。聞いた、どこ、どこに、という声がある。皆さん、静かに、とリーダーは促し、穏やかなそれでもよく通る声で、観察している鳥の説明を始めた。芽衣も借りた双眼鏡で見たが、鳥も保護色になっているので容易にレンズにとらえることができなかつた。何度か繰り返しているうちに要領をつかみ観察ができるようになってきた。

「あなた、器用ね、若いだけあるから直ぐに見つけられるようになるわ」と声をかけてくれた女性が言った。

しばらく歩くと小さな湖にでた。周囲は三百メートル程しかなかった。そつと水面を見ると、湖面の霧の中に綺麗な鳥たちが数羽浮かんでいた。

「オシドリですよ。綺麗な方が雄です。雄は雌の気を引くために目立つようにするのです。我々人間とは反対ですけどね」とリーダーは笑いながら言った。

「オシドリは一生相手を変えない鳥なのです。離婚はしない鳥なのです」と付け加えた。

「本当に羨ましいわ。内の亭主に見せてやりたいわ」と別の女性が言うと、そうだ、そうだ、ひとときわ賛同の声が上がった。

仮に、鳥たちの間に子供が出来なくても終生一緒にいるのだろうか、と芽衣は思ったが、質問することはなかった。

皆で湖を一周し帰路に就いた。鳥を見つけると観察するので、二時間近くかかった。

皆で湖を一周し帰路に就いた。鳥を見つけると観察するので、二時間近くかかった。

元来た小道を帰っていると、道端の雑草の中で、ガサガサと音が聞こえてきた。

「先生、何かいるわ」と一人が声を上げた。

傍によらないで、と先生は言い、落ちている少し長い小枝で雑草をかき分けると、そこには小鳥が一羽いた。

「四十柄ですね。ガラス窓にでもぶつかつたのでしょうか、羽が折れているようですね」

「保護してやらないのですか？」と芽衣は訊ねた。

「ええ、たとえ保護しても野生で育つた生き物は人間からの餌を食べないのですよ。それに怪我の程度がひどいようですから、保護してもね」「このままにしておくのですか？」

「可愛そうですが仕方がないので。おそらく狐かムジナに捕食されてしまうでしょうけど、仕方がないことなのです。自然の法則の中で生きてゆくしかないのです」

周りからは、可愛そうに、という声が上がっていたが、見つめているしかなかった。

さあ、帰りますよ、と先生が促し、一行は静々

とホテルに帰っていった。先ほどまであった賑やかさはなかった。

芽衣は後ろ髪引かれる思いだったがどうすることもできない。

芽衣はホテルに帰っても、傷ついていた鳥の事が気になった。

翌朝、バードウォッチングの一行は次の目的地に行ってしまった。

芽衣は朝食が済むと、一人で、昨日見た鳥を探しに行くことにした。

ホテルの近くだと思っていたが意外に遠く、閑静な森林に入ると方向感覚が麻痺するように感じる。

一人で森林を歩くのは怖かった。何か、得体の知れない怪物の様なものが急に出てくるのではないかと思うと、足が竦んだが、勇気を出して歩いた。

湿り気のある重い空気に新鮮な緑の匂いが混じり、かえって息苦しいほどだった。

しばらく進むとその場所があった。小枝を拾

い、雑草をかき分けた。雑草は芽衣の膝ぐらいいまであった。

しかし、そこに小鳥はいなかった。産毛の様な白い羽が数枚散乱しているだけだった。おそらく捕食されたのだろう。

しばらく芽衣はそこにいたが、気を取り直してホテルに引き返した。

自然界は死にみちています。油断するとすぐに死が近づいてきますからね。といったリーダーの言葉が頭の中で響いた。

七日間の特別有給休暇が終わり、芽衣は再び元の病棟に復帰した。

精神的に落ち着くまで、外来だけの仕事に変わることもできると、師長にいわれたが、芽衣はその話を断った。

芽衣の勤務している病棟は、外傷などの救急を扱う部門だった。内科系の慢性疾患を扱う病棟を希望した同級生もいたが、芽衣は、救急医療の方が自分の性格に合っていると思っていた。

芽衣は救急患者の看護をしている時に、組織

の一員として、その人の命を預かっているという充実感があった。

救急の処置が終わり、手術室から患者が病棟に移される。まだ、麻酔で眠っている患者の体にある生命を終わらせるわけにはゆかない。

芽衣は、患者の体温を測り、血圧や呼吸数、脈拍を確認するたびに命そのものを感じていた。

命はまず温かい。そして、体の一部が規則的に動いている。今、手術が終わったばかりの石森静雄という六十歳の男性患者も、麻酔のために意識こそないが確かに生きている。それも、安定して生きている。

手術室担当の看護師から引継ぎをおこなった。それによると、石森は小さな印刷店を経営しており、刷り上がった広告のチラシをスーパーマーケットにバイクで届けに行く途中、車と接触し転倒したということだった。

ヘルメットを被っていたので頭部の損傷はなかったが、腰椎と左大腿骨の骨折があり、命に別状はないが、今後の方針としてはリハビリが重要になるだろうという報告だった。

持病として糖尿病があった。

家族は妻の絹江、五十五歳、とだけ書かれていた。子供はいなかった。

石森を回復室に移した。石森の意識は朦朧としていた。時々、咳き込むが、吸引機につながれた細いチューブで、口や鼻から痰を吸引すると、石森は再び規則正しい呼吸をとりもどした。術後の合併症として、痰が詰まり、肺炎になることもあるので、呼吸管理は重要であった。また、手術創からの出血や感染にも注意がいる。患者は術後、すぐ自分で動くことはできない。そのため、臀部や背部に褥瘡ができやすい。これらを防ぐために、患者の体の向きを、時間を決めて変えることも必要であった。

心電図モニター、点滴のスピード、尿量、酸素飽和濃度など、石森の生命をささえている機械にも目を光らせていなければならない。どれか一つでも不具合が起これると、回復に時間がかかるだけでなく、最悪、死に至ることもある。緊張をしいられる環境が芽衣の精神を圧迫する。石森の意識が戻り、会話ができ、自分で食べ

られるようになると、徐々に芽衣は緊張から解き放たれてゆく。患者が回復するにつれ、芽衣の精神も回復してゆく。

石森が一般病棟に移ると、すぐにリハビリが始まった。

芽衣は、毎日のように、石森をリハビリ室まで車椅子で連れていった。

リハビリ室は古い別館にあった。新たに建て増しされた本館と別館の間は少しだけ傾斜があった。

行は下りなので楽だったが、帰りは反対に坂になるので力がいる。芽衣は車椅子の操作は看護学生の時に実習で習っただけだった。

操作は意外に簡単だったが、石森を車椅子に載せたり降ろしたりする移乗が難しく、力がいった。

一般には車椅子の操作にだけに注目されることが多いが、実際には患者をベッドから訓練室に運び、訓練の初めと終わりで再び移乗を行うと、一回の訓練で、四度の移乗を行う必要があった。教科書には回数まで記載されていない

い。

自ら力を入れることのできない人は意外に重い。
い。

他にも苦勞があつた。移乗を行う際に、患者の腰や胴体に手を回すので、どうしても患者の体臭がする。手術後しばらくはお風呂に入ることができないので、ベッドで体の清拭をするのが、完全に体臭が消えることはなかつた。

時に、患者が顔の近くで咳き込むこともあつたが、看護師としては嫌な顔をするわけにはいかない。慣れない作業で、芽衣の腕や腰に痛みが残つた。

リハビリが進むにつれ、石森も徐々に元氣を取り戻し、芽衣に冗談を言うようになつた。

石森には糖尿病があり、一般的に糖尿があると傷の治りが悪く、時には化膿することもあるが、そのような心配は杞憂であり、傷は化膿することもなく治癒していった。

時々、警察が石森のところに来た。石森を跳ねた犯人はまだ検挙に至っていないということだつた。

石森自身は保険に加入していたが、少額であつたため、医療費が心配だと警察に訴えたが、警察としてもどうすることもできないようだつた。

妻の絹江もほとんど毎日のように病院に来た。絹江は痩せており、表情も暗いまだつた。また、五十代であるが、白髪が目立ち、美容院にも通っていないように見えた。

夫のことで頭が一杯で、自分の事など考える余裕もないのかもしれない。

芽衣は、絹江と同じ洋服で何日も病院にきていることに気がついていた。しかし、心配はするが、それ以上の行動にでることは躊躇した。

芽衣は勤務が終わりスマホを見ると別居している健一郎からメールが届いていた。今週の土曜日の午後会えないか、ということだつた。

芽衣はいよいよか、と思つた。離婚の話が持ち上がり、別居を初めて半年が経つていた。

健一郎と話をする日がとうとう来た。いつも健一郎と出会う時、時間通りに行つたことはな

かった。遅れるのは大抵芽衣の方だった。申し送りは時間通りに進むことはなく、時には急患もあり、人の手が薄くなる時間帯に限ってそのようなことがよくあった。

しかし、健一郎と約束した日は申し送りも珍しく時間通りに終わった。

秋の日差しの中を芽衣は歩いていった。歩道の脇にある花壇の燃える様な赤い鶏頭やサルビアは動脈血を連想させる。

ふと、足を止める。

赤は生命の象徴だと芽衣は普段から感じていた。芽衣には、花たちが頑張れと応援してくれているように見えた。花たちは、風に吹かれ、まるで手を振っているようだった。

約束の喫茶店に入ると健一郎はすでに来ていた。久しぶりに見る夫は少し疲れているように見えた。

コーヒーを注文し、しばらくは世間話をした。

「離婚の話でしょ？」と芽衣は、いつまでも大切な話しを切り出さない健一郎の性格を知っているの、つい、言ってしまった。

健一郎は、無言でバックから紙切れを一枚とり出した。

離婚届だった。すでに健一郎のサインと印鑑は押してあった。芽衣はそれを預かった。

「最後に一つ頼みがある」と健一郎は言った。

芽衣は、最後の一つぐらい聞いてもいいと思つた。

「実は、甥の圭太が今度結婚するというのだが、その結婚相手に君も一緒に会ってほしいのだが」

圭太の両親は宮崎に住んでいた。父親の富雄が病気になる入院しているので、宮崎を離れることができないということで健一郎に白羽の矢が立つたらしい。

「俺一人では自信がないから、一緒に頼む」と頭を下げた。

「何か問題でもあるの？」

「とにかく会ってみてくれ」と理由について、健一郎は明言を避けた。

健一郎は優しいが、自分で決めきれない性格をしていた。そのような性格を、芽衣は好ましくもあり、物足りないとも感じていた。

面会の日時は一週間後と決まった。

その後もお互いの近況について話をした。

体調不良で休暇を取ったことを芽衣は話した。

健一郎は、もしかしたら、来年、ベトナムに出張するかもしれないという。まだ決まってはいるが、健一郎は前向きに考えている、と言った。

自分はいつもの生活を送っており、じっとしているつもりでも、周りは動いているのだ、と芽衣は感じた。

圭太の婚約者と会う日が来た。幸い天候はよく、この話はうまくいきそうな気がした。

芽衣は久しぶりに白のワンピースを着ることにした。健一郎と結婚する前によく着ていた。妊娠を経験していない芽衣は体型的にもそれを着こなすことができた。

午前十時前に約束のホテルに着いた。健一郎はすでにきていた。甥の圭太と婚約者の女性はロビーの喫茶店にすでにいた。

芽衣が近づくと二人の男性は立ち上がって芽衣を迎えてくれたが、女性の方はそのままだった。

「芽衣さん、忙しいのにありがとうございます」と圭太は言う、隣の女性もぺこりと頭を下げた。

女性はピンク色のワンピースを着て、車椅子に座っていた。

「戸川美沙さんです」と圭太が紹介した。

車椅子に乗っていることを悲しいことだと思っていないように明るく見えた。

彼女は、普通に、まったく臆することもなく、自然に座っていた。

芽衣が車椅子に気をとられ、声が聞こえなかったのかと思ひ、「戸川美沙さんです」ともう一度、圭太が紹介した。

美沙は大きな瞳で、自己紹介をした。若い女性らしい、明るい華やかな声をしていた。

圭太が、芽衣たち夫婦から預かった二匹のペット、ケンとメリーを散歩させていた時に、美沙と母親が出しているキッチンカーと出会った

こと。それが縁で、圭太が勤めているレトルト食品会社から製品を卸すようになったことなどを話した。

キッチンカーの名前は「みつちゃん」といい、主にコーヒーやハンバーク、ホットドックなどを売っているという。

「圭太さんにペットを押し付けて申し訳ないと思っていたけど、ある意味ペットたちのお陰で美沙さんと出会えた訳ね」と芽衣はほほ笑んだ。

もう二年も前になるが、芽衣と健一郎が、子供が出来ないことを紛らわそうとして、ペット売り場にいったことがあった。そこで芽衣は猫を、健一郎は犬をそれぞれ選んでしまった。

二人は一匹だけ飼うつもりだったが、どちらも自分の主張を譲ろうとはせず、凶らずも二匹になってしまった。

しかし、半年もしないうちに離婚話が持ち上がり、甥の圭太に二匹の面倒を見てもらうことにしたのだった。犬はケンと、猫はメリーと、それぞれが名前を付けた。

その名前を聞き、ひと昔、流行した車の名前

だ、と圭太は笑った。しばらくはペットたちのことで話は盛り上がった。

会話の間にも、芽衣はどうしても美沙の車椅子に目がいつてしまう。その視線に気づいた美沙は、生まれながらにして足の筋肉が弱い事などを話した。

何かにつかまれば少しなら自分の足で歩くことはできるが、将来的に車椅子のお世話にならず暮らせるようになる見通しはないだろうと言った。

美沙の声は弾み、声にさえも明るい色がついているように、芽衣には聞こえた。

芽衣には、この女性は車椅子を使っていることにハンディを感じている様子を、うかがい知ることができなかった。

一時間ぐらい会話をし、圭太は美沙を送って行った。ホテルのロビーに芽衣と健一郎は何となく座り、話をした。

「どう？」

「明るくて、可愛い娘さんね。車椅子に座っているけど、そんなハンディを感じさせないくら

い前向きで明るいお嬢さんね」

「圭太との結婚についてはどう思う？」

「最終的に結婚を決めるのは本人同士だと思うけど。車椅子を使っている女性と結婚するなんて、最初から苦労をするようなものだと、反対をする人もいるだろうけど、今日見ている限り二人を止めることはできないわ」と芽衣は言った。

健一郎は圭太の母親に、今日の様子を報告しなければならぬ。

「よし、分かった。ありがとう。圭太の両親には今日のことを話しておくよ。車椅子というハンデイはあるけど、あの二人なら大丈夫だと報告するよ」

「もう一つ、大切なことがあるでしょう？ 私たちの」と芽衣は言い、先日預かっていた離婚届の用紙を健一郎に渡した。

「私のサインと印鑑を押ししておいたから。これが受理されると私たちは赤の他人になるのね」

「赤の他人ではないけど、そうだな、赤と白の混じったような、関係が漂っているような関係

かな」と健一郎は彼なりの解釈をした。

別れ際、健一郎は、来年にはベトナムに支店を出すために出張することに決めたと言った。

一週間後に健一郎から連絡があった。圭太と美沙の結婚が了承されたとのことだった。

離婚届けを提出する時期を少しだけ伸ばさせてほしいと健一郎は言った。

それによると、圭太の父親は脳腫瘍で入院しており、病状があまり芳しくなく、半年はおろか一か月先も見通せないということだった。

父親を早く安心させるため、圭太と美沙の結婚式は早めにするようになった。

健一郎と芽衣は仲人役を引き受けることになった。仲人が離婚する訳にはゆかない。

圭太たちの結婚式が終わるまで、離婚届の用紙は役所に提出しないことにした。

二人の結婚式は教会でおこなわれた。

純白のドレスを纏った美沙は本当に綺麗だった。

美沙の母親の光子の目には涙が溢れ、新郎新

婦の姿はぼやけて見えた。

美沙には父親がおらず、出席者も少なかった。美沙側の出席者は母親の光子と親戚が三人だけだった。父親は美沙が小さい時、美沙の足の筋肉の発達が遅れ、このままの状態では将来も歩けないという事が判明した時から、仕事もせず、酒に溺れ、家に帰ってからは、光子に暴力を振るうようになった。

「お前が良くなかったからだ」と美沙の足の状態を一方的に光子のせいだと決めつけた。その内、夫は家に帰らなくなった。噂では、勤め先の会社の女性とどこかに行ったという。

足の不自由な幼子を抱え光子は途方に暮れる日々が続いたが、唯一の救いだったのは、美沙が明るく、逆境をものともしない強い精神力だった。

小学校に行くようになってもその性格は、周りからの強い偏見によっても曲げられることはなかった。

それどころか、いつの間にか美沙は皆の中心にいた。学級委員もすることもあった。

「車椅子の学童が、学級委員をすることは今までになかったことです」と担任は驚いていたことを光子はそっと思い出す。

その他にもいじめもあったようだったが、美沙は自室で悔し涙を流すだけで、光子には決してそのことを言わなかった。

高校を卒業してから、キッチンカーで移動販売を提案したのも美沙だった。

周りからは、止めておくと、反対されたが、美沙は一人でどんどんと計画を進めていった。

キッチンカーで使う軽四は特殊なため高価であったが、中古車をネットで調べ購入できたのも美沙のお陰だった。光子は家庭用のハンバーグは作ったことがあったが、商売として売るためには味が一定で、それなりに受け入れられなくてはいけない。そこで、美沙はレトルト製品に目を付けた。レトルトのハンバーグをそのまま販売してもすぐに飽きられてしまうのではないかと考え、美沙は既成のハンバーグに、独自の味付けをして、「みっちゃん」という移動販売カーで売ることにした。

これが意外に受けた。飲み物とセットで販売した。昼と夜の二回に分けておこなった。

昼はオフィスが多くある公園近くでおこない、夕方や休日には、町の中心を流れる大川の河川敷公園で販売することにした。

その河川敷に夕方、ペット二匹を連れて散歩に来ていたのが圭太だった。ペットたちがハンバーグの匂いに惹かれ、キッチンカーにやって来た時、芽衣は残りの食材をペットたちに与えた。そのことが習慣になり、週に二回は「みっちゃん」にやってきた。

その内、圭太とも話すようになった。圭太がレトルト食品の会社に勤めていることを知ると、圭太の会社からそれらを購入し、少しだけ味付けをして販売した。今では、キッチンカー「みっちゃん」は圭太の取引先のお得意さんになった。

最初、圭太は美沙が車椅子を使用していることは知らなかった。車の窓越しにしか話をしなかつたからだ。ある時、美沙が、ペットを触らせてほしいと言い、車の外に出たことがあった。

母親の光子は車の裏からスロープを出し、車と地面の間に傾斜を作った。

その上を美沙は馴れた手つきで器用に降りてきた。

「君、車椅子を使っていたんだ」と圭太は驚いたが、美沙は、ええ、そうよ、驚いたでしょう、と笑顔で言った。

意外そうな顔をした圭太をしり目に、美沙はケンとメリーを呼ぶと、二匹は美沙の膝の上に飛び上がってきた。

エプロンに肉の匂いが浸み込んで、ペットたちにとってはたまらなくいい香りなのだろう。

車椅子を使うようになったのかの説明をする時も、美沙に暗さは全くなかった。

そのことがかえって圭太には新鮮に思えた。この女性は、運命を運命として受け入れている。むしろ暗い運命であること諦めてないなかつた。

日を増すごとに、圭太は、車椅子に座った美沙に益々、強く引き付けられるようになった。

その様な若い二人を見て、光子はうれしい気

もしたが、これ以上仲が良くなつてはいけな
いという気もしていた。

このまま、もし恋愛関係に発展した場合、圭
太の両親や親戚の人たちは、車椅子の美沙を見
てどう思うだろうか。一般的に、このような恋
は認められないだろう、と光子は心配をした。
美沙にも圭太にも傷ついてほしくなかった。

しかし、光子の予想を遥かに超えて、二人の
恋愛感情は進んでいた。

ある日の夕方、いつものように圭太がキツチ
ンカーにやってきた。珍しくペットたちは連れ
て来なかった。

美沙が、お母さん、ちよつと来て、というの
で、車の裏で洗物をしていた光子はそれを中
断した。

いつもの圭太ではないことはすぐに分かった。
圭太は、光子の目を見つめ、美沙さんと結婚
したいと、静かではあったが、しつかりとした
声で言った。

光子はどう返事をしたらいいのか途方に暮れ
た。

「圭太さん、お気持ちは有難いけど、美沙がど
んな状態で、これから先も車椅子を手放せない
のかもしれないのよ」

「それは十分に分かっていきます。それでも、一
緒に力を合わせていきたいのです」と圭太は美
沙を見た。

美沙もそのことをすでに承諾しているようだ
った。光子はいくら言っても二人の決意は固い
事を悟った。

圭太は今後の事を話した。会社を辞め、調理
学校に通い、調理師の免許を取るという。

将来的には、美沙と小さな洋食店を開きたい
と言った。

それからの圭太と美沙の行動は早かった。
圭太は古い一軒家を借り、美沙のために車椅
子が自由に出入りできるように改築した。

若い二人に理解を示し、古い家でもあり、大
家さんもすぐに許可してくれた。

圭太と美沙の結婚式が終わった。

芽衣は仲人という初めての役をこなした時、

私たち夫婦も少しは新しい夫婦のために役にた
てて良かったという思いと、もうすぐ離婚する
夫婦が仲人をしたことが、かえって申し訳ない
ような気もした。

芽衣の心は晴れたり曇ったりと、今日一日の
間に、複雑に変化した。言葉には言い表せない
ぐらゐの感情が体中に溢れた。しかし、それを
うまく外に出すことができなかつた。

唯一、美沙の純白のドレス姿を見た時だけ、
瞬く間に芽衣の心から雨雲が去り、太陽と青空
が表れた。

その時の興奮は式の後にも続いた。

自分の結婚式でさえもこれほどの高揚感
はなかつた。若い二人の選んだ道が、常識的には
平坦な道ではなかつたことがそうさせているの
だろう。

とにかく、見守って行くしかないと芽衣は
思った。

仲人役をしてから一週間後に、健一郎から離
婚届が役所で受理されたとの連絡があつた。

これからは別々の道を歩んでゆくしか道はな

い。先日、健一郎は海外出張すると言つていた。
彼も彼なりに将来を模索しているようだった。

健一郎は、父親の病氣のために結婚式に出席
できなかつた圭太の両親に、写真を送つた。

圭太の父、富雄は末期の脳腫瘍を患つていた。
意識はあるが、安静が必要であり、いつ何時急
変してもおかしくない状態だった。

健一郎は結婚式の時の様子をなるべく詳しく
書いた。式の様子を録画したCDも送つた。

「健一郎さんが送つてくれた手紙やCDで結
婚式の様子がよく分かつた。お相手の娘さんが
車椅子の事は圭太から聞いていたが、しつかり
した可愛い女性のようによかつたな」と富雄は
病室でリングの皮を剥いている妻の佐久子に声
をかけた。

「ええ、私もどうなることかと心配していまし
たけど、健一郎さんも大丈夫だと言つてくれた
ので安心しました」

病室の窓からは、昔、子供の頃、よく遊んだ
小高い山が見えた。

「せっかく入った会社を辞めて料理学校に行く
と圭太は言っていたな。本当に馬鹿な奴だな。
自分から難しい方向ばかり選んで行っている」
と富雄は静かに言った。

圭太が車椅子の女性と結婚すると言ったり、
今の会社を辞めて調理師免許をとり、いずれは
小さな洋食店を始めたいと聞いた時、富雄は激
怒した。しかし、圭太の気持ちは全く変わるこ
とはなかった。それどころか、自分たちでどん
どんと話をすすめていた。親たちは成り行きを
はらはらしながら見つめるだけだった。

「もし、儂が死んだら、生命保険の半分は圭太
にやってくれ。少ないけど、今から学校に行く
なら少しでも金があった方がいいだろうから」
と富雄は遺言のように言った。

石森静雄が退院した。本人はもとより、妻の
絹江も元のように歩けると思っていただけに、
歩くことができないう状態で、車椅子に乗ったま
ま退院することにショックを受けた。

「先生、私はもう歩けないのでしょうか？」と

何度も担当の医師に詰問する石森の姿を思い出
す。

「全く希望がないという訳ではありませんから、
リハビリでがんばりましょう」と医師は元気づ
けるような言葉をくりかえすのみだった。

精神科にかかっているという絹江の表情は相
変わらずすぐれなかった。それでも、夫の退院
日はきちんと挨拶をして帰っていた。

翌日には、次の患者が待ち受けている。石森
が退院して半年が経った。

救急病院という忙しさは、芽衣から悲しみや
悩み事をしている時間を奪ってくれる。

芽衣の生活は、病院で働いているか、アパー
トで寝ているかのどちらかだった。

離婚した当初は、いろいろなことを考えたが、
過去のことを考えても仕方のない事だと割り切
った。そうすることで、毎日を通り過ぎた。

石森が退院して半年経った。

「芽衣さん、ちよつと」と師長が病棟で働いて
いる芽衣に声を掛けた。

面談室に入ると男性が二人いた。一見して患

者ではなさそうだった。

「こちらは警察の方です。石森静雄さんのことで聞きたいことがあるそうよ。あなたは石森さんの担当だったので、警察の方がお話を伺いたいそうよ」

二人の刑事は携帯の身分証明手帳を提示した。ドラマでは見るが、本物は初めて見た。

「実は、石森静雄さんですが、おととい、亡くなられました」

「お亡くなりになった？」

「ええ、それも睡眠薬による自殺だったのですが、奥さんも一緒に亡くなっていました」

絹江の暗い表情が思い出される。石森が退院する日に、絹江が、これからどうすればいいのか、不安で仕方がないということをお口にしたことを思い出す。

「入院中に石森さんはどのような方でしたか？」

「どのような、と言われても、交通外傷で入院された方で、リハビリも順調に進み退院されましたが」

「石森さんは車椅子の状態だったそうですが、

将来的に自分で歩けるようになったのでしょうか？」

芽衣は、入院していた時の石森の表情を思い出した。

入院当初は暗い表情だったが、傷が治り、リハビリも進むにつれ、石森は活気を取りもどしているように見えた。

「とても自殺をするようには見えませんでしたか？」

「奥さんの方はどうでしたか？」と石森の妻について質問してきた。

「奥さんについては、今後の事が不安だと言っておられましたが、詳しいことは分かりません。ただ、不眠が続くので精神科にかかっていると聞いていましたか」

刑事たちに何度尋ねられても、石森が自らの命を絶ったとは信じられなかった。

刑事たちが帰った後、石森が一生懸命車椅子を操り、リハビリに行く姿しか芽衣には思い浮かばなかった。

もし、石森が睡眠薬自殺をしたら、将

来、車椅子から立ち上がれないという絶望感があつたからなのだろうか。それとも、夫婦が将来に希望を見い出せなかつたからだろうか。どちらにしても、二人は進んで死を選んでしまつた。ふと、芽衣は休暇中に森林の雑草の中で傷つきもがいていた小鳥のことを思い出した。きつと、小鳥はもつと生きたかつたのだろう。たとえ羽が傷つき再び大空を飛ぶことができなくても生きていたかつたのではないだろうか。しかし、自然の掟は小鳥に残酷だつた。瀕死の小鳥に選択肢は与えられていなかった。

しかし、石森夫婦には選択権があり、手を伸ばせば掴めることのできるところにそれはあつたが、彼らはそれに手を伸ばすこともなく、死という暗闇にのみこまれてしまつた。

人間の体自体が車椅子のようなもので、心臓や脳や血液、その他の臓器がつまつた容器のようなものなのだろうか、と芽衣は考える。

精神も肉体という容器に入っている。その容器自体が年をとり古くなつてゆく。考え方によつては、精神は古くはならないだろうが、肉体

という容器はどうしても古くなる。

石森夫婦にはもつと生きてほしかつた。折角治療を受け、回復するまでになつたのだから、今まで以上に生きてほしかつた。

芽衣は生と死が頭の中で交差したまま仕事を続けた。

法律上は赤の他人になつたけど、時々メールすること、来月からベトナムに出張することの連絡が健一郎からあつた。

離婚して五年が経つた。芽衣に再婚の話もあつたが、結婚までには至ることはなかつた。

一か月に一度来る健一郎のメールを楽しみにしている自分がいた。

それにしても彼のメールに添付させている写真には心惹かれる風景があつた。

町の市場なのだろうか、見たことがないような果物や魚が並べられ、活気に満ちていた。

その中にたびたび登場する女性がいた。ベトナム地方特有の円錐形の帽子を被り、民族衣装のアオザイを着ていた。アオザイは体のライン

をくつきりと浮かせる衣装として有名だ。

今、健一郎がお付き合いでもしている人なのだろうか、などと芽衣は少し嫌な気分ですれらを眺めた。

ベトナムで始めたレトルト事業はうまく軌道に乗っているらしく、年々、売り上げを伸ばしていた。暑い国なので、パックされた食品は冷蔵庫に入れておかなくても日持ちがすることが受けたようだった。

ある日、健一郎から写真ではなく文章が送られてきた。

圭太夫妻が今、どうしているか、見て来てほしい、という依頼内容だった。

健一郎からの情報によると、圭太と美沙は新しく店を初めたという。住所と電話番号が書かれていた。

芽衣はネットで調べてみた。

店の名前は「チャリオット」だった。名物料理は、ハンバーグやカレーなどだった。店の評判もいいようだった。芽衣は早速電話を入れ次の土曜日の夕方を予約した。

圭太は周囲の反対を押し切り、車椅子の美沙と結婚した。この時、芽衣と健一郎はまだ夫婦だったので、仲人として結婚式に出席した。式は教会で行われた。出席者も少ない寂しい式だった。

披露宴もなく、すぐに終わってしまった。しかし、圭太と美沙の新しい夫婦から発せられるエネルギーのようなものを芽衣は感じた。あの時に感じた感覚は本物だったのだろうか。圭太に預けたままになっているペットのケンとメリーはどうしているのだろうか。

車椅子に乗った美沙は、周囲の偏見や心もとない視線に耐えながら結婚生活を送っているのだろうか。

予約した土曜になった。朝から曇りがちだったが、午後からは晴れ間も出て来た。

店は土曜の夕方だったので、比較的空いていた。

店は小ぢんまりとした店で、十人も入れれば満席になった。駐車場も三台ほどしかなかった。

圭太は頭に白いコック用の帽子を被っていた。

美沙は注文を取り、車椅子の前にトレーがおけるように改造した車椅子でハンバーグなどを運んでいた。

「芽衣さん、お久しぶりです。ようこそチャリオットへ」と圭太はコック用の白い帽子をとりペコリとお辞儀した。美沙も出てきて、同じようにお辞儀をした。圭太は少し太り、顔もふっくらしていた。

美沙の顔色もよく元気そうに見えた。営業用のエプロンを掛けていたが、芽衣にはすぐ美沙の体の変化が分かった。

「美沙さん、もしかしてお目出度なの？」

美沙は大きな目を下に向け、顔を赤らめ、妊娠六ヶ月ですと言った。

「そう、それはおめでどう。圭太さん、益々頑張らなきゃね」

圭太は美沙と結婚した後、すぐに会社を辞め調理師資格を取るために学校にいったという。いつまでもキッチンカーで移動販売をしている訳にもゆかず、一念発起し、美沙と計画を立てたようだ。話している間にも客が入ってきた。

「いらっしやいませ」と圭太と美沙は声を掛けた。

カップルの多い店の中は笑顔と笑い声とで満ち溢れていた。

かつて自分たちも味わっていた雰囲気だと芽衣は一人座り懐かしく思った。石森夫婦たちにも、若い頃、今のような時間があつたと思う。

店自慢のハンバーグ定食は美味しかった。こ

この奥さんは車椅子だけど、とても明るくて、元気づけられる、とブログを上げる人もいた。

客の中には美沙と一緒に写真を撮りたがる客もいたが、美沙はそんな客に対しても嫌な顔一つせず応じていた。その笑顔は自然で、周りのものも明るくした。

食後のコーヒーマも美味しかった。会計を済ませると、圭太が店の奥に芽衣を案内した。

そこにはかつて飼っていたケンとメリーがいた。犬のケンはすぐに元飼い主だと分かり芽衣に飛びついて来た。ネコのメリーも思い出したらしく、ゆっくりと芽衣の足元にすり寄ってきた。

芽衣は座り、二匹を抱きしめた。ごめんね、と芽衣は言い、ケンとメリーを離して外に出た。

夕日が店の看板を照らしていた。

「チャリオット、いい名前でしょう。健一郎おじさんが付けてくれたのですよ」と圭太は言った。

初めて芽衣は聞いた。

「車椅子の美沙を見た時、古代エジプトの戦士が戦った戦車を思い浮かべたそうです」

健一郎には、美沙の車椅子が戦う戦車の様に見えたのだろう。

亡くなってしまった石森の車椅子は、単に肉体を運ぶだけの器具だったのだろうか。

振り返ると二人がまだ見送ってくれていた。

夕日に照らされた美沙の車椅子は、芽衣にもエジプトの古代戦士たちが戦いに使ったチャリオットの様に見えた。

さあ、明日からまた、私の戦いも始まると思ふと、いつになく芽衣の足取りは軽くなった。

これから先も、命と対峙してゆかなければならない。

芽衣は自分が選んだ看護という戦いの場こそ自分に与えられた使命であり、運命だと感じた。来年の三月、圭太と美沙の間に新しい命が生まれるという。

その時を想像しながら芽衣は深まる秋の街を歩いた。

(了)

選評

小説 柳生尚志

今回の応募点数は二編。小説二であった。

「五百年の時空を超えて」を入選とした。また「チャリオット」も佳作に選んだ。

◆入選「五百年の時空を超えて」

中世新見庄を有名にした東寺百合文書。莊園領家であった東寺に残された文書が百の桐の合箱に保存されていたことからこの名がある。国宝であり、ユネスコの記憶遺産にも登録された。

作者は令和の今を生きるユカリとアキラの姉弟がおばあちゃんの四十九日の法要の日から筆を起し、中世新見庄にまぎれ込むという展開で稿を進める。

そこに登場するのは五百年も生きてきた「うらない婆」である。ユカリとアキラは有名なたまかきたちともまじわる。

年貢の滞りを解消する任務を帯びて直務代官として赴任した祐清。二年間の年貢を滞納した豊岡名主を所払いにしたことから恨みを買ひ、巡視途中に殺される。

こわもての祐清が人間味を見せはじめるところや代官や名主、残された仏像などにもたぐみに触れている。

やむを得ず百ページに及ぶ大作になってしまったが推敲を重ね、もっと簡略にできなかったのだろうか。

◆佳作「チャリオット」

主人公は芽衣という看護師の女性。体調不良で三泊四日の旅に出る。結婚したが不妊のため夫婦仲も悪くなり別居、離婚届けを持参した夫は最後の頼みだと言って甥の結婚相手と会ってくれと言う。

相手の女性は車椅子に乗っていた。車椅子の女性と結婚は苦勞を承知だが二人を止めることは出来なかった。

彼女は明るく前向きでキッチンカーでハンバーグの店「チャリオット」を出した。二人の結婚式に立ち会った芽衣は彼女の車椅子がエジプトの古代戦士が戦いに使ったチャリオットに見えた。

芽衣は自分が選んだ看護という戦いの場を使命であると感じた。車椅子の彼女にも新しい命が誕生する、という結びが良い。

有給休暇を終え、職場に復帰した主人公が最初に治療に当たった交通事故の男性のくだりは、もっと簡略にしてほしかった。

令和七年度 第32回 新見市文学選奨作品募集要項

募集部門 (1) 小説(随筆・戯曲・児童文学を含む) (2) 詩 (3) 短歌 (4) 俳句 (5) 川柳 (6) ジュニアの部

(小説、童話、詩、短歌、俳句、川柳など)

入賞 各部門入選1人、佳作5人以内、ジュニアの部は各部門とも佳作複数人。入選者・佳作者には、賞状と副賞を贈呈する。

応募資格

(1) 新見市在住者、出身者、勤務者、市内で文学活動に参加している人。(2) ジュニアの部は小学生・中学生に限る。(3) 入選した人は二年続けて同一部門に応募できない。

応募点数 小説1編(四百字詰め原稿用紙で三十枚以上百枚以内)、詩3編、短歌10首、俳句10句、川柳10句。ジュニアの部は小説1編(枚数自由)、詩2編、短歌5首、俳句5句、川柳5句。いずれも日本語で書かれた作品に限る。

応募規約

(1) 令和六年八月一日から令和七年十一月三十日まで創作した作品に限る。新聞や会誌などに掲載された作品の応募は差し支えないが、他の文学賞の受賞作品は除く。(2) 用紙は原則として四百字詰め縦書き原稿用紙を使用すること。データで作成する場合は原稿用紙の設定で、文字サイズ12ポイント程度で印刷したものを提出し、事務局から依頼があった場合は電子データを提供すること。(3) 短歌部門は仮名遣いについて「新仮名遣い」か「旧仮名遣い」かを原稿用紙に明記する。(4) 作品の用紙には名前を書かない。別紙に応募部門・本名(発表時にペンネームを希望する場合はペンネームと本名を併記し、いずれにもふりがな)・住所・電話番号・満年齢・職業(ジュニアの部は学校名と学年)を書いて添付すること。応募者の個人情報が入選の通知など本事業のみに使用する。(5) AI(人工知能)を利用した作品は応募できない。(6) 応募作品は一切返却しない。(7) 入選作品の著作権は作者に帰属するが、印刷、オンライン等での公開については主催者が無償で利用できる。

審査 新見市教育委員会および公益財団法人新見美術振興財団が選定する審査員が行い、各賞を選出する。

応募期間 令和七年十月七日(火)～十一月三十日(日) 厳守(当日消印有効)

発表 令和八年一月に新見市ホームページで発表。

その他 主催・新見市教育委員会・公益財団法人新見美術振興財団 特別協力・備北民報株式会社

令和七年度

新見市文学選奨作品集

新見市の文学

編集 新見市教育委員会

公益財団法人新見美術振興財団